

瀬戸大橋建設に伴う 埋蔵文化財調査概報(IV)

塩 浜 遺 跡
西 方 遺 跡
花 見 山 遺 跡
大 浦 遺 跡
大 浦 浜 遺 跡

1981・3

香川県教育委員会
本州四国連絡橋公団

瀬戸大橋建設に伴う 埋蔵文化財調査概報(IV)

塩	浜	遺	跡
西	方	遺	跡
花	見	山	遺
大	浦	浦	跡
大	浦	浜	遺

1981・3

香川県教育委員会
本州四国連絡橋公団

例　　言

1 本書は、昭和55年度に瀬戸大橋建設に伴って実施した、坂出市与島・櫃石島の各遺跡の発掘調査概報集である。

なお、昭和53年度に、与島西方遺跡B₂地区を発掘しているが、未報告であったため、併せて本書に収録した。

2 発掘調査は、本四公団より委託をうけ、香川県教育委員会文化行政課が実施した。

調査組織は下記のとおりである。

総括課長	篠川高美	調査総括所長	増田正伯
課長補佐	前田治衛	係長	伊沢肇一
副主幹	松本豊胤	調査担当	
庶務主査	東山敏昭	(塩浜遺跡)技師	藤好史郎
主事	増田宏	"	中野保
		嘱託	白本清
(西方遺跡)		主任技師	齊藤賢一
(大浦遺跡)		技師	森本義臣
		"	東原輝明
(花見山遺跡)		技師	町川義晃
		"	真鍋昌宏
(大浦浜遺跡)		技師	林正弘
		"	西村尋文
(大浦浜遺跡)		技師	大山真充
		"	安田和文
(大砂古直生)		嘱託	大砂古直生
		"	羽床正明
		"	玉城一枝

3 調査後の整理・報告は、担当者がそれぞれ分担して行った。執筆分担は文末に明記した。編集は各遺跡ごとに実施した後、全体編集は大山が担当した。

4 調査の実施や整理・報告の際に下記の方々から多大な協力、教示を受けた。記して謝意を表したい。

与島瀬戸大橋対策協議会・同自治会、櫃石島瀬戸大橋対策協議会・同自治会、丸亀市本島支所、岡崎敬、坂東祐司、間壁忠彦、間壁茂子、森浩一、山本三郎、櫃本誠一、福田正継、近藤義郎、安田喜憲、松藤和人、柳田俊雄、佐藤良二、坂口淳子、中村早苗、高橋克夫

総 目 次

I	昭和55年度調査の概要	1
1	今年度の調査から	1
2	調査の経過	4
II	塩浜遺跡の調査	7
1	はじめに	7
2	調査の経過	10
3	調査区の設定と土層について	11
4	遺構	15
5	遺物	23
6	おわりに	37
III	西方遺跡の調査	49
1	はじめに	49
2	B ₄ 地区の調査	50
3	C ₁ 地区の調査	60
IV	花見山遺跡の調査	69
1	櫃石島の遺跡	69
2	調査の経過と概要	76
3	土層序と遺物出土状況	80
4	遺物	104
5	おわりにかえて	139
V	大浦遺跡の調査	141
1	はじめに	141

2	調査の経過.....	142
3	調査区の設定と調査の方法.....	146
4	土層について.....	148
5	遺物について.....	151
6	おわりに.....	165
VI 大浦浜遺跡の調査		177
1	はじめに.....	177
2	位置と環境.....	181
3	調査の経過.....	185
4	調査区画設定と調査方法.....	187
5	土層と遺物出土状況.....	191
6	主な遺構.....	198
7	遺 物.....	211
8	おわりに.....	237

図 版 目 次

(塩浜遺跡)

- 図版 1 (1) N区上段遺構群全景(南より)
 (2) N区上段遺構群全景(北より)
 2 (1) N区上段遺構群南部(北より)
 (2) N区上段遺構群北部(北より)
 3 (1) N e - 4.5南壁上層(北より)
 (2) N区第3トレーン北壁土層(南より)
 4 (1) N区ピット(74.75.175)断面
 (2) N区ピット(98.99.100)断面
 5 (1) N区ピット(102)内部根石
 (2) N区ピット(137)内部根石
 6 (1) N区下段遺構群全景と西壁土層(東より)
 (2) N区ピット(234)断面
 7 (1) N区ピット(222.223.224)断面
 (2) N区ピット(216)断面
 8 (1) N区ピット(219.220)断面
 (2) S e - 4 東壁土層(西より)
 9 (1) 小形管状土錐B (2) 小形管状土錐A
 (3) 小形有溝土錐 (4) その他のタイプ
 (5) タコ壺
 10 (1)(2) 大形有溝土錐
 11 (1) 大形有溝土錐(遺構面直上出土)
 (2) 大形有溝土錐及び不明土製品
 (ピット、溝内出土)
 12 土器(上段遺構群)
 13 土器(上段及び下段遺構群)
 14 土器(下段遺構群及び瓦器・龜山焼)
 15 土器、古銭、石器、貝
 16 (1) 塩浜C地区、第1トレーン西壁北部
 (2) 塩浜C地区、第1トレーン流木出土状況

(西方遺跡)

- 図版 1 B₂地区出土石器実測図(1)
 2 B₂地区出土石器実測図(2)
 3 B₂地区出土石器実測図(3)
 4 B₂地区出土石器実測図(4)
 5 B₂地区出土石器実測図(5)
 6 B₂地区出土石器実測図(6)
 7 B₂地区出土石器実測図(7)

図版 8 C₁地区出土石器実測図(1)

- 9 C₁地区出土石器実測図(2)
 10 C₁地区出土石器実測図(3)
 11 C₁地区出土石器実測図(4)
 12 C₁地区出土石器実測図(5)
 13 (1) 調査地遠景
 (2) B₂地区 e - 5 西壁土層序
 14 (1) B₂地区出土ナイフ形石器背面
 (2) B₂地区出土舟底形石器背面
 15 (1) B₂地区出土横長剣片背面
 (2) B₂地区出土横長剣片背面
 16 (1) B₂地区出土横長剣片背面
 (2) B₂地区出土横長剣片背面
 17 (1) B₂地区出土横長剣片石核背面
 (2) B₂地区出土横長剣片石核
 18 (1) B₂地区出土縦長剣片・不明石器
 (2) B₂地区出土石錐
 19 (1) C₁地区精査状況
 (2) C₁地区 k - 1・2 遺物出土状況
 20 (1) C₁地区出土ナイフ形石器・翼状剣片
 (2) C₁地区出土縦長剣片・尖頭器・舟底形石器
 21 (1) C₁地区出土削器
 (2) C₁地区出土横長剣片石核・縦長剣片石核

(花見山遺跡)

- 図版 1 (1) 第II次調査区終了写真(西より)
 (2) 第III次調査区 T ~ 7 T(南東より)
 2 (1) 5 c d 遺物出土状況
 (2) 7 c d 東壁
 3 (1) 17 T 北壁
 (2) 発掘調査風景
 4 (1) ナイフ形石器 I(B面)
 (2) ナイフ形石器 II(B面)
 5 (1) ナイフ形石器 III(B面)
 (2) ナイフ形石器 IV - 1・V(B面)
 6 (1) ナイフ形石器 IV - 2(B面)
 (2) ナイフ形石器 IV - 2(B面)
 7 (1) ナイフ形石器 IV - 3(B面)

図版 7 (2) ナイフ形石器 (B面)

- 8 (1) A-I類剥片 (B面)
 (2) A-II類剥片 (B面)
 9 (1) B-I類剥片 (B面)
 (2) B-II類剥片 (B面)
 10 (1) 二次調整のある剥片 (B面)
 (2) ハリ質安山岩製の剥片 (B面)

11 (1) 石核I (B面)

- (2) " (A面)

12 (1) 石核II (A面)

- (2) " (B面)

13 (1) 石核II (B面)

- (2) " (A面)

14 (1) 石核III (A面)

- (2) " (B面)

15 (1) 石核IV-1 (A面)

- (2) " (B面)

16 (1) 石核IV-1 (A面)

- (2) " (B面)

17 (1) 石核IV-2 (B面)

- (2) " (A面)

18 (1) 石核IV-3 (B面)

- (2) " (A面)

19 (1) 石核IV-4 (A面)

- (2) " (B面)

20 (1) 石核V (A面)

- (2) " (B面)

21 (1) 舟底形石器

- (2) 橫長剥片、同石核 (表面)

22 (1) 細石刃 (表裏面)

- (2) 橫長剥片石核接合資料

23 (1) ハリ質安山岩、母岩、剥片 (表面)

- (2) 細石刃核未製品、コア・プランク、再生剥片 (表面)

24 (1) 細石刃核A-Ii ii類 (表面)

- (2) 細石刃核A-II、B、C類 (表面)

25 (1) サヌカイト製細石刃核 (表面)

- (2) 黒曜石製石器 (表面)

26 (1) 尖頭器 (A面)

- (2) 尖頭器 (A面)

27 (1) スクレイバー

図版 27 (2) スクレイバー

- 28 (1) スクレイバー

(2) "

- 29 (1) スクレイバー

(2) "

- 30 (1) スクレイバー

(2) "

- 31 (1) スクレイバー

(2) "

32 (1) 叩石

- (2) 繩文式土器

33 (1) 石鎌

- (2) "

(大浦遺跡)

図版 1 大浦遺跡出土石器実測図(1)

- 2 " (2)

- 3 " (3)

- 4 " (4)

- 5 " (5)

- 6 " (6)

- 7 " (7)

- 8 " (8)

- 9 " (9)

- 10 " (10)

- 11 " (11)

- 12 " (12)

- 13 " (13)

- 14 " (14)

- 15 " (15)

- 16 " (16)

- 17 " (17)

- 18 " (18)

- 19 " (19)

- 20 " (20)

- 21 " (21)

- 22 " (22)

- 23 " (23)

- 24 " (24)

- 25 大浦遺跡出土土器拓影図(1)

- 図版 26 大浦遺跡出土土器拓影図(2)
- 27 上空より大浦遺跡全景（朝日新聞社提供）
- 28 (1) 遺跡遠景（東より）
 (2) 発掘調査区全景（北より）
- 29 (1) ナイフ形石器
 (2) 縱長剝片、舟底形石器
- 30 (1) 縱長剝片、舟底形石器
 (2) 細石刃
- 31 (1) 細石刃核
 (2) 削器
- (大浦浜遺跡)**
- 図版 1 大浦浜遺跡調査区全景航空写真
 （朝日新聞社提供）
- 2 (1) 調査区遠景（北東から）
 (2) E～H-21～26区全景（南から）
- 3 (1) S X01検出状況（北から）
 (2) S X01検出状況（西から）
- 4 (1) S X01石出土状況（北から）
 (2) S X01断削状態（東から）
- 5 (1) S X02（南から）
 (2) S X02（西上から）
- 6 (1) S X02断削状態（北から）
 (2) S X03断削状態（北から）
- 7 (1) G・H・I-15～20区遺構全景（北から）
 (2) G-18区 S K01（東から）
- 8 (1) H-18区 S P03遺物出土状況（南から）
 (2) G-15区 S K01遺物出土状態
- 9 (1) J-21区船形土製品出土状態
 (2) G-11区第3層製塙土器出土状態（北から）
- 10 (1) C～F-11～14区遺構群（西から）
 (2) C～F-11～14区遺構群（北から）
- 11 (1) J区第1土器群
 (2) J区第3～第6土器群（南から）
- 12 (1) J区第3土器群（西から）
 (2) J区第4土器群
- 13 (1) J区第6土器群
 (2) J区第9土器群（ミニチュア土器）
- 14 (1) 弥生土器（木の葉紋）
 (2) 弥生土器（木の葉紋）
- 15 土師器高坏
- 図版 16 土師器壺・鉢、ミニチュア土器
- 17 須恵器
- 18 (1)～(4) H-18区 S P03出土製塙土器
 (5)～(7) G-15区 S K01出土製塙土器
- 19 (1) G-18区 S K01出土土製塙土器
 (2) G-18区 S K01出土土製塙土器
- 20 (1) H-14区 S K01下層出土土製塙土器
 (2) H-14区 S K01下層出土土製塙土器
- 21 (1) 船形土製品（上から）
 (2) 船形土製品（横から）
- 22 (1) 丸瓶 (2) 小錘
 (3) 花形座金具 (4) 錫具
 (5) 万年通宝 (6) 神功開宝
 (7) 隆平永宝 (8) 長年大宝

挿 図 目 次

55年度調査の概要

第1図 与島・櫃石島位置図 2

(塩浜遺跡)

第1図	週辺の遺跡(与島及び羽佐島) 8
2	塩浜遺跡グリッド配置図 12
3	N区土層図 13
4	S区土層図 14
5	ピット断面図 16
6	N区遺構平断面図 17
7	下段N b - 6 遺構面出土焼土 19
8	作業風景 19
9	小形管状土錐Aタイプ度数分布図 24
10	小形管状土錐Bタイプ度数分布図 24
11	小形、大形有溝土錐度数分布図 24
12	小形有溝土錐度数分布図 24
13	土錐実測図(表土層~上部包含層出土) 27
14	土錐実測図(遺構面上出土) 28
15	土錐実測図 ⁽¹⁾ ピット溝内出土 29
16	土錐実測図 ⁽²⁾ その他のタイプ 29
17	上段遺構群出土・土器実測図 30
18	下段遺構群出土・土器実測図 32
19	土器実測図 33
20	石器実測図 35
21	古錢拓影図 36
22	花粉分析サンプル採集作業 39
23	塩浜C地区土層図 40
24	塩浜C地区土器実測図 40

(与島西方遺跡)

第1図	西方遺跡調査区位置図 51
2	B ₃ 地区土層序実測図遺物出土状況 (a, b, c, d, -5, 6 - e - 5 西壁) 53
3	B ₃ 地区土層序実測図遺物出土状況 (ij - 6 西, 北壁) 55
4	B ₃ 地区土層序実測図遺物出土状況 (a, c - 5, 6 南壁, e - 5 南壁) 57
5	石礫実測図 59
6	C ₁ 地区実測風景写真 60
7	C ₁ 地区土層序実測図 63
8	叩き石実測図 66

(花見山遺跡)

第1図	櫃石島遺跡分布図 70
2	地形測量図及びトレント配置図 77
3	第2次調査区土層断面図 81
4	第3次調査区土層断面図(1) 83
5	第3次調査区土層断面図(2) 85
6	17c d 発堀風景写真 94
7	遺物出土状況図(1) 95
8	遺物出土状況図(2) 96
9	遺物出土状況図(3) 97
10	遺物出土状況図(4) 98
11	遺物出土状況図(5) 99
12	遺物出土状況図(6) 100
13	遺物出土状況図(7) 101
14	遺物出土状況図(8) 102
15	遺物出土状況図(9) 103
16	縦長剥片 108
17	縦長剥片石核 109
18	縦長剥片, 縦長剥片石核接合資料 111
19	ハリ賀安山岩, 母岩, 剥片 112
20	細石刃核未製品 114
21	コア, ブランク, 細石刃核未製品 116
22	細石刃核 A - I i 類 118
23	細石刃核 A - II ii - A - II 類 121
24	細石刃核 A - II · B · C 類 122
25	サヌカイト製細石刃核 123
26	細石刃核再生剥片 124
27	細石刃 125
28	打面転移のパターン 127
29	スクレイバー(1) 131
30	スクレイバー(2) 132
31	スクレイバー(3) 133
32	スクレイバー(4) 134
33	スクレイバー(5) 135
34	スクレイバー(6) 136
35	調査終了後全景写真 138

(大浦遺跡)

第1図 調査風景(北より).....	142
2 調査風景(南より).....	142
3 大浦遺跡地形図.....	143
4 大浦遺跡調査区画図.....	147
5 大浦遺跡土層図(1).....	149
6 大浦遺跡土層図(2).....	150
7 ナイフ形石器模式図.....	154

(大浦浜遺跡)

第1図 昭和52年度大浦浜予備調査風景写真.....	178
2 大浦浜遺跡地形図.....	179
3 横石島周辺の遺跡.....	182
4 備讃瀬戸航空写真.....	184
5 N H K テレビ録画風景.....	185
6 大浦浜調査区画設定模式図.....	187
7 大浦浜遺跡調査区画図.....	188
8 たてわ北麓地区、区画設定模式図.....	189
9 15区横断面土層図.....	192
10 遺構配置図(1).....	193
11 遺構配置図(2).....	195
12 S X 01 実測図.....	198
13 S X 02 実測図.....	199
14 S X 03 実測図.....	200
15 J区土器群分布図 その1.....	203
16 J区土器群分布図 その2.....	205
17 第1土器群出土状態図.....	207

第18図 第2・6土器群出土状態図.....	208
19 第4土器群出土状態図.....	208
20 I・J-15区南壁断面図.....	209
21 粘土造構群発掘風景写真.....	210
22 弥生土器壺実測図.....	212
23 弥生土器甕実測図.....	213
24 弥生土器底部実測図.....	214
25 土師器(高杯)実測図.....	215
26 土師器(高杯・壺・甕・鉢)実測図.....	216
27 土師器(甕)実測図.....	217
28 ミニチュア土器実測図.....	218
29 須恵器種別出土地区一覧図.....	220
30 須恵器実測図(1).....	221
31 須恵器実測図(2).....	222
32 須恵器実測図(3).....	223
33 製塩土器(1-23H-18区S P 03-24-27G-15区S K 01)実測図.....	225
34 G-18区S K 01出土製塩土器実測図(1).....	227
35 G-18区S K 01出土製塩土器実測図(2).....	228
36 G-18区S K 01出土製塩土器実測図(3).....	229
37 G-18区S K 01出土製塩土器実測図(4).....	230
38 G-18区S K 01出土製塩土器実測図(5).....	231
39 H-14区S K 01下層出土製塩土器実測図.....	232
40 F-4区第3層出土製塩土器実測図.....	233
41 船形土製品、奈良三彩小壺実測図.....	235
42 銅製品実測図.....	236
43 祭祀遺物出土位置図.....	239

表 目 次

(塩浜遺跡)

第1表 ピット一覧表.....	20
2 小形管状土錐A.....	25
3 小形管状土錐B.....	25
4 小形有溝土錐.....	25
5 大形有溝土錐.....	25
6 土錐計測値一覧表.....	41
7 出土古銭一覧.....	36

(花見山遺跡)

第1表 横石島の遺跡.....	71
2 第1次調査区遺物一覧表.....	89
3 第2次調査区遺物一覧表.....	91
4 第3次調査区遺物一覧表.....	93
5 予備調査(横II-3-H)遺物一覧表.....	94

(大浦遺跡)

第1表 ナイフ形石器計測表.....	155
2 椎長剣片、石核計測表.....	157
3 石錐計測表.....	163

(与島西方遺跡)

第1表 C ₁ 地区グリッド別石器組成表.....	67
--------------------------------------	----

第4表 グリット別石器組成表	167	第14表 細石刃核計測表	173
5 石材別石器組成表	169	15 尖頭器計測表	174
6 縱長剥片分類表	170	16 叩き石・磨石・不明石器観察表	174
7 縱長剥片石核分類表(1)	170	17 土器観察表	175
8 縱長剥片石核分類表(2)	170		
9 ナイフ形石器・舟底形石器計測表	171		
10 縱長剥片計測表	172	(大浦浜遺跡)	
11 翼状剥片計測表	170	第1表 土器観察表	240
12 縱長剥片石核計測表	173	2 ミニチュア土器観察表	243
13 細石刃計測表	173	3 須恵器観察表	245
		4 製塙土器(H-18区S P03出土)観察表	251

I 昭和55年度調査の概要

I 昭和55年度調査の概要

1 今年度の調査から

櫃石島・大浦浜遺跡、シャベルで慎重に土をすくいあげ、小さな肥後鋤で、刷毛で、砂をはらいのけしていく、はらいのけた砂が風に舞う。調査員一同息を止めて見守っている。「奈良三彩」の出土である。注意深く、そして慎重に、取り上げる。気品をたたえた、あくまでも美しい奈良三彩の小壺をまのあたりにし、1300年前の奈良時代へと夢をはせる。

○

櫃石島の砂浜上にある大浦浜遺跡は、今年度より発掘調査にとりかかった。7,000m²の砂浜より、縄文時代から中世に至る長期間の遺物や遺構が出土した。中でも、中世初頭のものと推定される製塩施設の一つである「粘土土塙」は注目される。

この大浦浜遺跡では、古墳時代あたりから塩作りが行われていた。当時の製塩法は、海水を海藻等に注いで濃縮し、それを製塩土器（師楽式土器）に入れて煮つめ、水分を蒸発させて、塩を取り出す。この方法が一般的とされてきた。これに使用した製塩土器が浜一帯で数多く出土している。

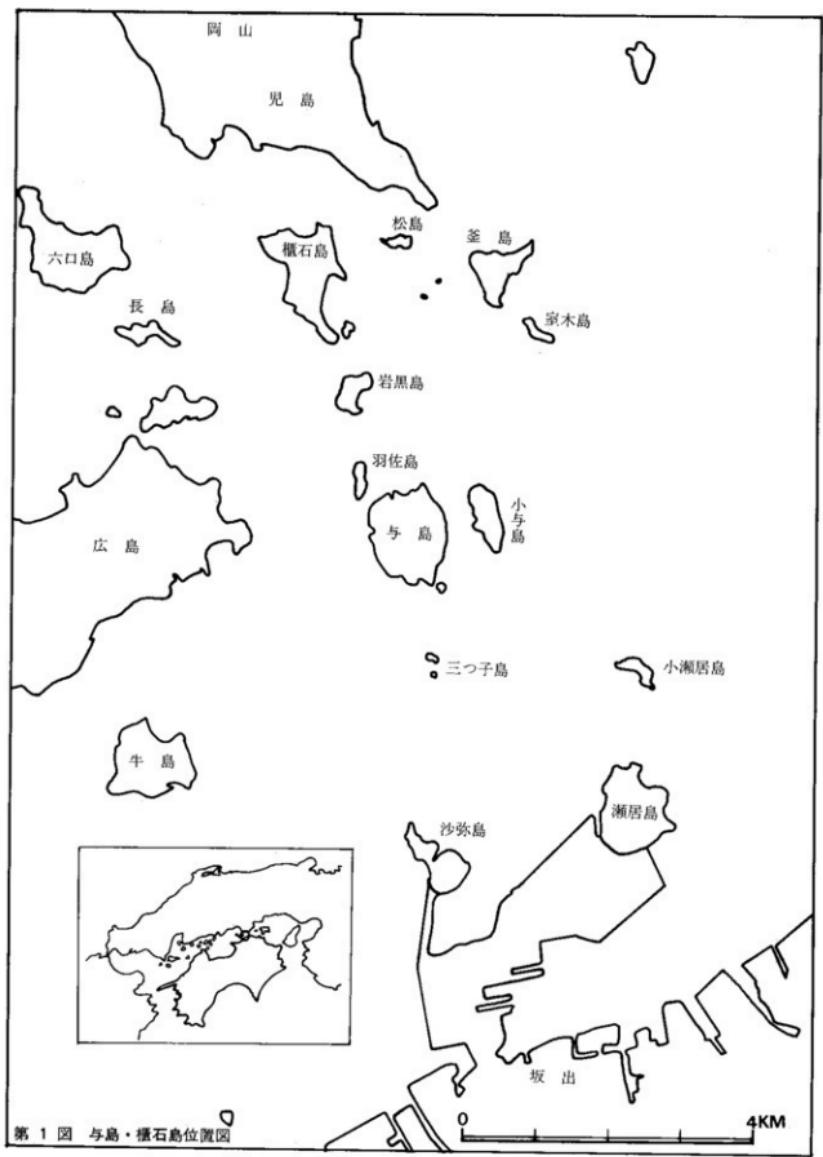
時代が進み中世になると、土器を使用する方法から土器を使わない方法へと製塩法が変化したと、考えられる。それを裏付ける「粘土土塙」が7基発掘された。この「粘土土塙」が製塩工程の中でどんな役割をもち、どのように使用されたのか、また、土器を使用しての塩作りがいつの時代まで実施されていたのか、究明すべき課題は多い。これらが解明できれば、歴史上の空白とされている古代から中世にかけての製塩法が明らかとなる。

また、祭祀に使った「奈良三彩の小壺」が出土した。径4cm程度の小壺である。唐三彩を模して、朝廷の直轄工場で作ったものである。玄海灘に浮ぶ「沖の島」、笠岡市の「大飛鳥」などの国家的祭祀遺跡でその出土例をみると、全国的に出土例の少ない貴重な遺物である。

さらに、皇朝十二銭（万年通宝、神功開宝、隆年永宝、長年大宝）、帶金具（丸柄）、小鉢などが、この大浦浜遺跡の海岸線近くで発掘された。丸柄は、大宝令によると、高級官吏が公式の公服に装飾したとされているものである。中央政府と関連深い祭祀の場所であることがますます強まってきたと言えよう。しかし、これら祭祀に関係する遺物の出土をみたものの、それぞれの遺物が遺構を伴わず散布的に出土している状況から考慮して、当該地が祭祀遺跡であると断定するまでには至っていない。しかし、ここは塩業集団が大規模に長い年月、営々と塩作りを続けた所であると共に、航海の安全を祈った跡と推定される要素が多い。

櫃石島のはば中央に横たわる花見山頂部（76m）から東へ派生した尾根上に花見山遺跡がある。向こう岸に鷲羽山を望み、周囲に備讃瀬戸の島々を見わたす。昨年度からの継続調査で、今年度は約6,000m²の調査をし、この遺跡の予定範囲を完了した。

この遺跡は、細石刃や細石刃核が多く出土するのに対し、縦長剥片や国府型ナイフ形石器の出土が少ない。このことは、この遺跡が氷河期の終わり、すなわち、旧石器時代の終末期に比



定されるものであるとされている。

また、花見山遺跡より南に下った丘陵上に立地する大浦遺跡は、旧石器時代の縦長剝片、ナイフ形石器、細石刃をはじめ、縄文時代の押型文土器、石鏃等の遺物を検出し、6ヶ月にわたった発掘調査を終了した。

一方与島、西方遺跡はすでに「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告(I)与島西方遺跡」で一般に周知している。今年度は、石櫛神社から南にのびる尾根上の一部を調査した。

昭和52年度から昭和54年度までの調査で、ナイフ形石器をはじめ、翼状剝片、縦長剝片、舟底形石器など、旧石器の遺物や石鏃、弥生式土器、神功開宝が出土しているので、今年度の調査が期待されたが、発掘に伴う土砂流出の恐れについての問題が出た、調査は1ヶ月で中止を余儀なくされた。

塩浜遺跡は、西方と東方の尾根に挟まれた入江にあり、昨年度からの継続調査で、今年度は約6,900m²調査した。

中国から輸入された磁器類や縄文土器、土師質土器を中心に、旧石器時代から現代に至るまで各種の遺物が出土した。また、鎌倉～室町時代と推定される攝立柱跡が確認された。当時、塩浜地区の入江に漁業を専業とした集落であったのかも知れない。今後の解明が期待されるところである。

○

地理学者フェルディナンド・フォン・リヒトホーフェン（ドイツ）は、西のローマ帝国と東の漢帝国の二つの世界を結んでいた道を「絹の道」と名付けた。

瀬戸内海にも、東の大和と西の筑紫、都と西海を結ぶ「海上の道」があった。

備讃瀬戸に浮ぶ櫃石島が「海上の道」にどんな役割を占めていたのかは今後の課題であるが瀬戸内海の海上交通は古来より開けていたが、備讃瀬戸はこのほか多島海の景観を有するもあって、潮流の変化や、沖つ風の突風などきびしい自然条件の中での航海は大変な危険をはらんでいたと推測できる。

朝廷は、715年、官物の海上輸送を一時禁止する措置をとっている。危険度の大きさを考えることであろう。

大浦浜遺跡出土のミニチュアの舟形土製品は、このような危険な海上航海に対する『安全』へのひたむきな祈りであった。

「海上の道」は物を運んだだけではなかった。人間が、文明が、西から東へ、都から西海へと運ばれたのである。

○

本年度の発掘調査によって出土した遺物は旧石器時代から現代にいたるまで長期間にわたるもので、コンテナにして細片や剝片を含めて、1,000箱になんなんとする莫大な量にのぼっている。

これらの出土遺物を分類や整理することによって、旧石器時代から中世にかけての備讃瀬戸の歴史が漸次解明されている、しかし整理や分類した遺物は一部分であり、今後に残された課題が多い。

2 調査の経過

瀬戸大橋架橋に伴う海峽部埋蔵文化財発掘調査は、昭和51年に予備調査を開始して以来、今年で5年目を迎えた。今年度の調査は昭和55年4月1日付けで本州四国連絡橋公団との間で締結した「海峽部埋蔵文化財発掘調査委託契約（その4）」によって着手した。契約調査地区は櫃石島の花見山遺跡、大浦遺跡、大浦浜遺跡、与島の西方遺跡、塩浜遺跡で都合約30,000m²であった。が、西方遺跡の調査を都合により途中で中止せざるを得なくなつたので、本州四国連絡橋公団と協議し、昭和55年12月25日付けで変更契約を締結した。

○

今年度の海峽部埋蔵文化財発掘調査は、調査対象地すべてが未買収であったために、用地交渉にかなりの時間を費やした。

まず櫃石島・花見山遺跡、大浦遺跡、大浦浜遺跡の調査を始めるに当って、香川県瀬戸大橋対策室と本州四国連絡橋公団と、再三借地について協議した。また、昭和55年4月17日には、児島事務所で今年度第1回目の連絡会議を、本州四国連絡橋公団、香川県瀬戸大橋対策室、香川県教育委員会の三者参加のもと開き、今年度の予定と未買収地での発掘調査について協議した。その結論に基づいて、4月21日、櫃石島公民館において、発掘調査予定範囲該当地権者と会合をもった。席上、発掘調査地の借地と当該地の立毛補償について考慮するのであれば、発掘調査に協力するとの確約を得た。早速、借地料と立毛補償の評価基準について、香川県瀬戸大橋対策室と協議を重ね、借地料と立毛補償の評価基準案を作成し、再度5月9日、香川県瀬戸大橋対策室にて、本州四国連絡橋公団、香川県瀬戸大橋対策室、香川県教育委員会の三者会合をもち、本州四国連絡橋公団に対し発掘調査費に補償費を組み入れることを要請し、了承を得た。

5月12日、櫃石島公民館において、櫃石島文化財保護協議会を開いた。その席上、昨年度の調査概況と今年度の調査予定について報告した。同時に、発掘調査地の借地料と立毛補償の評価基準を公表した。

また、同日の午後引き続いて、発掘調査予定範囲該当地権者との会をもった。地権者37名に対し、今年度の調査範囲と借地料及び立毛補償評価基準を提案し、審議を重ね地権者の了解を得た。

早速、花見山遺跡、大浦遺跡、大浦浜遺跡の担当者は地権者宅を一軒一軒訪問し、減収補償契約をかわし発掘承諾を得た。さらに各現場において確認のため地権者に立会を求めて伐開作業にとりかかり、6月中旬には櫃石島において本格的に発掘調査が進行することとなった。

ところが、梅雨の時期を迎え、長雨に悩まされた。与島・西方遺跡において、「発掘調査に伴う土砂流出についての恐れがある」と地元住民からの申し出があった。

西方遺跡は、西方山頂部にあり傾斜面上に土のう積みをして、五月初旬より発掘調査を続けていたところである。5月15日、夜7時から与島青年会館において、香川県瀬戸大橋対策室の参加を得、地元自治会と発掘調査について話し合いをしたが了解を得るに至らず、1ヶ月の調査で中止せざるを得なかつた。西方遺跡の調査再会については来年度以降の課題となつた。

○

調査体制については、坂出連絡事務所を中枢に、従来より設置している与島事務所に加えて、櫃石大浦浜事務所を新設し、花見山遺跡、大浦遺跡、大浦浜遺跡の各発掘現場の事務管理、遺

物の一時的整理の機能をもたせた。坂出連絡事務所も旧鎌田図書館へ移転拡充し遺物の洗浄、注記、分類、接合復元等の整理作業を能率的、系統的にできるよう人員を配した。さらに、増加する出土遺物の処理に対応するため、スケッチグラフを1台導入し、実測のスピード化をはかった。また、製図、トレース室や主要な遺物を展示するコーナーを設けた。しかし、出土遺物は予想をはかるにオーバーし、早くも収蔵室が手狭まになりかけてきた。

調査員は3名を一班として構成し、遺跡毎にリーダーを中心に調査方法の検討や、整理報告書作成などを行った。当初の予定では、整理期間を3ヶ月取って報告書を作成する方針であったが、調査開始が予定より遅れたり、調査が延びたりして、3ヶ月の整理期間を取ることが出来ない調査員もあった。

作業員については、櫃石島70人、与島33人、岩黒7人は従来通りであるが、今年度はピーク時に当るため新たに本島より30人の作業員を動員し、従来の120人と坂出連絡事務所の12人の整理作業員を合わせ、総勢160人余りの人員で発掘現場作業と整理作業を行った。

今年度の発掘調査において、奈良三彩の小壺をはじめ、ミニチュア舟形土製品、帶金具、粘土土塊など目新しい遺物や遺構が出土し、発掘現場や坂出連絡事務所を訪れた見学者がかなりあった。

また、発掘調査報告会を開催（55年9月21日善通寺市民会館にて）し盛況を呈した。さらに「埋もれた備讃瀬戸の歴史」と題して出土品の展示会（55年10月6日～12月25日、白梅会館）を行い、海峡部埋蔵文化財発掘調査の成果を一般に周知した。

(伊沢)

発掘調査面積

(m²)

遺 跡 名		当初契約	変更契約
櫃 石 島	花 見 山 遺 蹤	5,276	5,956
	大 浦 遺 蹤	3,280	3,280
	大 浦 浜 遺 蹤	6,299	7,000
与 島	塙 浜 遺 蹤	1,250 7,033	1,250 5,597
	西 方 遺 蹤	7,200	1,500
計		30,338	24,583

II 塩浜遺跡の調査

II 塩浜遺跡の調査

1 はじめに

今回報告する塩浜遺跡、西方B₂、C₁地区は、香川県坂出市与島町に所在する。遺跡が立地する与島は、香川県坂出市沖約1.4km、周囲約4.2kmの瀬戸内海に浮かぶ小島である。

与島は花崗岩が基盤となっており、島内には採石の丁場が各所にみられ、与島石と呼ばれる花崗岩の切り出し、加工が島の中心産業である。島は東西の丘陵と、それにはさまれた低地部とからなり、北西は「U」字形に開き、ちょうど馬蹄形状を呈する地形をなしている。東部に位置する丘陵部は東方と呼ばれ、標高77mを計り、西部に位置する丘陵部は西方と呼ばれ標高72mを計る。塩浜という地名が示すように中央部の低地は、昭和46年12月まで塩田が存在していた。

与島は島全体が量の多寡を別にすれば旧石器時代に属する石器の散布地とすることができるが、東方・西方は北部に位置する羽佐島と並び、量的には備讃瀬戸では有数の遺跡である。西方はA・B・C地区に分け、羽佐島遺跡と共に瀬戸大橋建設に伴う調査が実施されている。^{注(1)} 西方遺跡の中心はA地区で、西方中の最高の標高を計る。10数万点の遺物が出土しており、そのほとんどが旧石器時代に属し、ナイフ形石器に代表される時期のもので、細石器は出土していない。羽佐島遺跡は、与島の西北に浮かぶ無人島で20数万点の遺物が出土しており、西方同様その大半は旧石器時代に属するものである。西方A地区と異なり、ナイフ形石器のみならず細石器も出土している。今回報告するB₂地区、C₁地区は、A地区から南へ延びる尾根上に立地し、A地区より標高は低い。旧石器時代に属する遺跡としては他に、東方遺跡、大洲遺跡、シノダ遺跡がある。東方遺跡は調査面積が少ないので全体像は明らかではないが、遺跡の規模・量ともに西方に優るとも劣らない遺跡である。有舌尖頭器も出土している。大洲遺跡は東方の一部として把握することができ、与島における旧石器はその立地からして大きく三つの群に、羽佐島を含めれば四群に区分することができよう。与島における旧石器時代の遺跡の様相は、調査が進んでいる櫃石島の花見山遺跡、^{注(2)} 大浦遺跡が細石器を中心とする時期の遺跡であるだけに、その中間に位置する羽佐島遺跡と共に、瀬戸内における旧石器時代の重要な位置を占めるものである。ただ前述したように、与島を含めた備讃瀬戸の遺跡はその多くが尾根上に立地することや、その基盤が花崗岩のバイラン土であるため、バミスを中心とする層位的な理解には適かない遺跡という研究上の弱点があることは残念である。

旧石器時代につづく縄文時代の資料には与島は、それほど恵まれていない。中央部の低湿地に向う西方からの谷筋のはば中央部に立地する塩浜遺跡C地区において、縄文時代後期初頭を中心とする土器群が若干出土しているものの構造はまだ確認されていない。遺物としては、縄文時代に属する可能性のある石鏃などが、西方遺跡及び塩浜A地区からも出土している。^{注(3)}

弥生時代及び古墳時代に属する遺跡としては、大洲浜遺跡がある。島の東部の狭い砂洲上に形成された製塩遺跡で、脚台がつく製塩土器も出土しているが主体は脚台がつかない6世紀な



遺跡名	遺跡の性格	調査期	主たる報告書
1 西方遺跡A地区	旧 石 器	53.4~54.1	「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告書(I)」1979年
B ₁ 地区	旧 石 器	52.12~53.6	前掲書『概報(I)』1978年
B ₂ 地区	旧 石 器	54.3	前掲書『概報Ⅱ』1981年
C ₁ 地区	旧 石 器	55.5~55.6	前掲書
2 堀浜遺跡A地区	本 章 参 照	55.4~55.11	本章参照
B地区	旧石器～中世	55.1	—
C地区	縄 文 後 期	54.6~54.7 55.2~55.3	前掲書『概報Ⅲ』1980年 本章参照
3 シノダ遺跡	旧 石 器	—	—
4 タテハ遺跡	奈良時代以降の土器片	—	—
5 山の神遺跡	旧 石 器	—	—
6 大洲浜遺跡	製塙土器	—	—
7 東方遺跡	旧 石 器	—	—
8 ミドロ遺跡	旧 石 器	—	—
9 長崎鼻遺跡	方形石組(性格不明)	—	—
10 長崎鼻古墳	陪塚(?)石室2基	—	—
11 大洲遺跡	旧 石 器	55.2~55.3	前掲書『概報Ⅳ』1981年
12 羽佐島遺跡	旧 石 器	53.7~54.11	前掲書『概報Ⅲ』1979年

第1図 周辺の遺跡（与島及び羽佐島）

いし7世紀代に属するものである。製塩土器は塩浜遺跡C地区においても出土している。弥生時代に属する石鏡は島内各地から出土している。東方の丘陵の先端には長崎鼻古墳と呼ばれる墓跡があり、一基しか現存しないが2基の組み合わせ箱式石棺をその主体部としている。

与島西方遺跡A地区において皇朝十二銭に属する「神功開寶」¹¹⁽¹⁸⁾が、また羽佐島遺跡において¹²⁽⁹⁾縁釉陶器が出土しているが、いずれも遺構に伴つた資料ではない。

その後与島で明確な遺跡として確認されたものに今年度調査され、今回報告する塩浜遺跡A地区がある。昭和51年度に予備調査が実施され、現在A地区と呼称している地区に設定されたトレンチの、I-i-5において鎌倉時代の良好な包含層の存在が確認され、昭和55年度の本調査が実施された。遺跡が立地する舌状の低平な台地は馬蹄形を呈する与島のほぼ基部の西方よりに位置し、東方の丘陵とは、島中央部の低地により隔てられ、西方の丘陵とは、一条の谷筋により断たれている。遺跡は、鎌倉時代から室町時代にかけての集落遺跡で、低平な舌状台地の東南斜面を削平して住居を営んでいた。現在の島内における集落の立地上の重要な要素に、生活用水に恵まれることと、冬期における季節風を避けていること及び日照に恵まれていることがあげられる。このことは中世においても同様なことが立地上の条件として考えられる。塩浜遺跡A地区的住居跡は舌状台地の東南斜面に立地し、日照には充分恵まれている。調査区の南部の谷筋の基部には集水点があり、7・8月に降水量が少ない瀬戸内式気候の中にあって、4月から11月までの調査期間を通じ湧水が絶えることがなかった。島内においては水に恵まれた場所とすることができる。また台地の西には標高72mを計る西方の丘陵があり冬期の季節風がさえぎられる。絶好の立地として良いと思われる。また島中央部の低地は塩浜C地区の調査により海面下に没していた時期の存在が考えられ、また島の古老の話によれば、「子供の頃、年寄りから『島中央部の低地の奥まで潮が来ていた』との話を聞いた。」ということがあり、現在でこそ標高11~13mに位置する住居跡が、立地として高すぎるのではないではなかろうか。今回報告するのは昭和55年度実施した塩浜遺跡のA地区と昭和54年度末調査を実施したC地区である。対象面積はA地区が5,597m²、C地区が1,250m²である。

(中野・藤好)

注

- (1) 香川県教育委員会「与島西方遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(I)』1978・8
香川県教育委員会「与島西方遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告(I)』1979・3
香川県教育委員会「羽佐島遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報II』1980・3
- (2) 香川県教育委員会「与島東方遺跡」『香川県埋蔵文化財調査報告』1973・9他
- (3) 坂出市教育委員会 1980・2 調査
- (4) 香川県教育委員会「花見山遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報III』1980・3 本概報中「花見山遺跡」
- (5) 本概報中「大浦遺跡」
- (6) 香川県教育委員会「塩浜遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報IV』1980・3 本概報中「塩浜C地区」
- (7) 森井正「坂出市御栗子与島貝塚」『香川県文化財調査報告 第7』1962・3 香川県教育委員会
- (8) 香川県教育委員会 1979・3 に同じ
- (9) 香川県教育委員会 1980・3 に同じ
- (10) 香川県教育委員会「与島地区」『香川県教育委員会予備調査報告(I)』1978

2 調査の経過

調査日誌抄

- 4月7日 昭和55年度、シオハマ地区の発掘を開始する。
雨期に入る前に湧水の多いS区を優先して発掘することとする。
- 4月11日 まだグリッド内のトレントでは、近現代の搅乱層であるため実測する必要は、認められない。ただし、一括取り上げを行う場合、土質の差が不鮮明であることから、遺物の出土した深さを土層図で確認できるように、レベル掘りで、なおかつ表土層からの深さを計測することとする。
- 4月15日 S区搅乱層のレベル掘り、一括取り上げ、
~23日 一部実測。
- 4月24日 S e - 5 第3層より青磁底部出土、内面に「足」文、谷筋グリッド壁面湧水のため軟弱化、注意する必要あり。
- 4月28日 N区、一部発掘開始。
- 5月19日 一括取り上げが一段落、今後実測を必要とする面が多くなってくると考えられる。しかし、遺物も少なく、遺構もなし。
- 5月20日 湧水、雨水のため、グリッド内に水がたまり作業にならない。水中ポンプ必要！
- 5月22日 文教厚生委員会、現地視察。
- 5月26日 本日、水中ポンプ導入、作業ベース大幅にアップ。
- 6月5日 現在までのS区のグリッドでは、中世の遺物は以外と少なく特徴のあるものも少ない。その下層からは、サヌカイトしか出土しない層となる。
- 6月9日 午前中霧のため停船勧告、午前中の作業中止。
- 6月10日 現場作業は、ほぼ順調に進行している。だが遺構もなく单调で疲れる。
- 6月12日 湧水のため谷筋グリッドの壁面軟弱化、危険、梅雨が本格化するまでに谷筋の調査を終了させるか、雨期が終るまで待つか、今後の天候だい。
- 6月25日 S e - 9, 10の壁面崩壊、復旧に手まる。谷筋の調査は、梅雨期をはずすべきである。
- 6月23日 雨が断続的に降る。谷筋のグリッド壁面
↓ 大幅に崩壊、調査員A、作業員数名と共に埋れかかる。他のグリッドも壁面が軟弱化しているため安直に作業員をグリッド内に入れることはできない。
- 7月4日 谷筋の調査一時中止、N区に主力を導入する。
- 7月23日 本日より谷筋に全力集中。
- 7月25日 Sc - 1 グリッドで直径30~50cmの壁が4個まとめて出土。
- 7月28日 Sc - 1 石組み出土グリッド、土砂止めをしていたにもかかわらず崩壊、集水地点であるため湧水多量、なお崩れる危険性大、復旧作業はかどらず。
- 7月29日 湧水、土砂崩れ続く、これ以上の発掘作業は危険性が高すぎると判断、下部の遺構が存在する可能性もなくこの地区的発掘を中止する。
- 8月22日 S区の発掘作業終了、明確な遺構の存在は認められなかった。
- 25~27日 N区東北部にグリッドの新設、N b - 5, N c - 4 に溝状遺構、ピット出土。溝内の遺物より時期が限定できそう。
- 9月1日 今後の発掘計画を現場にて打ち合わせ、遺構面の広がりを確認するためAチーム、その他他の発掘区担当Bチームを編成。
- 9月18日 Aチーム遺構面の広がりを確認、約 300m²、ピット、溝は上段と下段の間にわかれており、比高差約2.70m、現在までのピット総数 120、ピットは、一定の配列がある。シオハマ地区で初の住居跡発見！Bチーム調査終了、遺構なし。
- 9月19日 全員で遺構面の調査にあたる。
- 9月20日 遺構面地区的トレントを抜張、掘り下げ実調、遺構面直上層、溝より土鍤、土師碗、皿、瓦器小片、青磁底部、古錢（「祥符通宝」、「祥符元宝」）など出土。
- 10月9日 遺構全域のピット、溝検出、全景写真、ピット総数 238個、溝 3本。
- 14~20日 遺構平面図、ピット断面図作成。ピット内埋土の除去、ピット内より大型有溝土鍤、土師碗、皿、土鍋片、瓦器片、古錢（「祥符通宝」）出土。
- 21~25日 遺構地区土層線引き、写真、実測など。
- 27~31日 ピットの配列検討、埋めもどし、一部土層図作成。
- 11月4日 物品を坂出事務所へ送る。本日をもって、シオハマ地区的調査を終了。

3 調査区の設定と土層について

予備調査のI-i-5トレントで良好な包含層が検出され、谷筋の集水点を中心として管まれた鎌倉時代の集落跡の存在が予想された。当初予定された今年度の本調査塩浜地区の調査対象面積は、7,033m²であったが、対象地が未買収で借地をして調査に入ったため、借地できなかった土地は今年度の調査からは除外した。最終的には、5,597m²の面積となった。実質発掘面積は、1,220m²弱である。

対象地区は南部の谷筋と北部の斜面部に分かれ、地形の傾斜方向も異なることから、南部をS区、北部をN区と調査区を2分した。N区は基準線が磁北と一致し、S区は磁北より西へ45°ふっている。両区ともに5m方格のグリッドを設定した。前述したように借地をして調査を実施したため、各畠地の段差を有する畦を破壊しないことが条件となり、調査自体制約があるものであった。S区は谷筋であり取水を目的とした遺構の存在も想定され、多くのトレントをグリッド内に設定した。土層図（第4図）を見てもあきらかかなように斜面部とは全く異なる土層を示し、土砂の堆積や、地下水によると考えられる鉄分等が集積する等、谷筋特有の様相を呈する。d-4（第4図）などでは灰黒色を呈する腐植土や、砂層が堆積した箇所が認められ、集水された水が流れた痕跡が認められたが、その流れを中心とした取水の施設は存在しなかつた。復旧を条件とした段差のある谷筋の調査は、調査自体の進行や土層等の把握において制約が多いものであり、借地による調査はできるだけ避けるべきであろう。

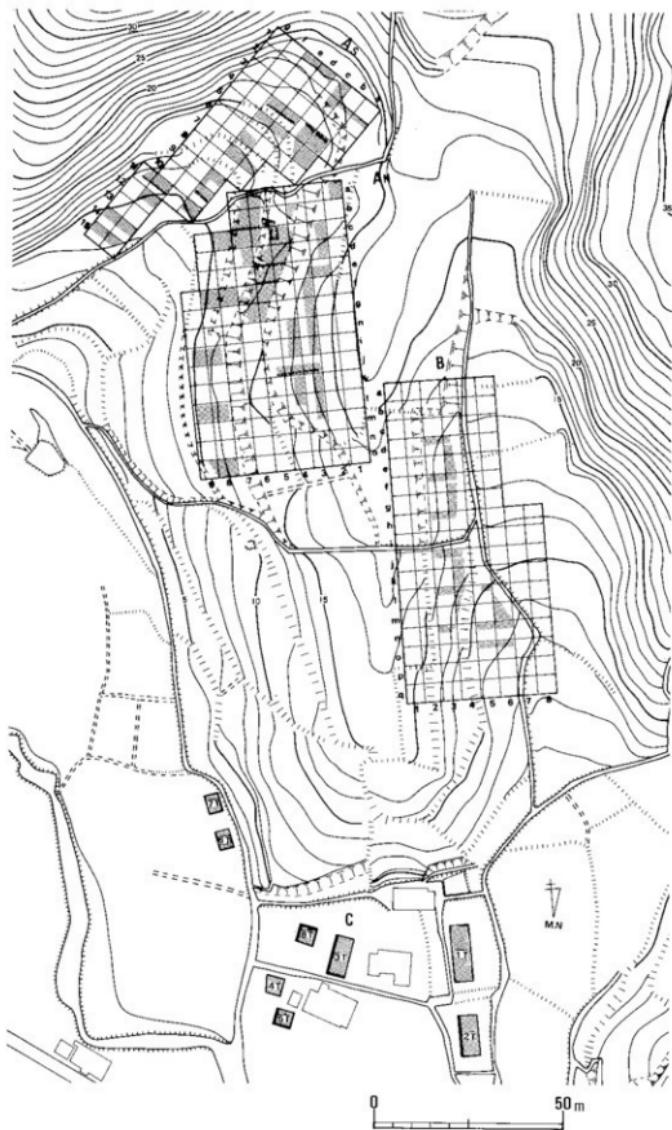
N区は斜面部であり、調査開始前はみかん等の果樹を植した畑地であった。斜面部を削平して畑地としており、遺構も破壊を受けていることが予測された。今回調査した区域は大きく三分される。舌状台地の頂部で東南に向く緩斜面部、その下部に位置する急斜面を削平した面及び最下部の谷筋に面する緩斜面からなる。

頂部は、後世に完全に削平されており、表土直下は岩盤が風化した堅い花崗岩弱風化バイラン土層となる。遺構も削平されたものであろう。その下に位置する急な斜面を削除して形成された平坦面に鎌倉～室町にかけての遺構群が検出された。

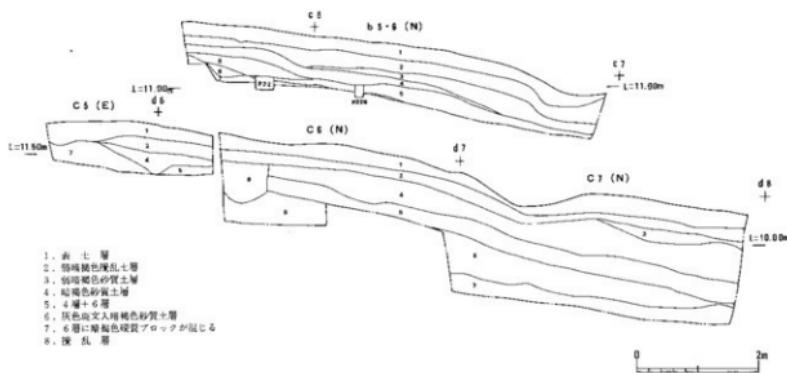
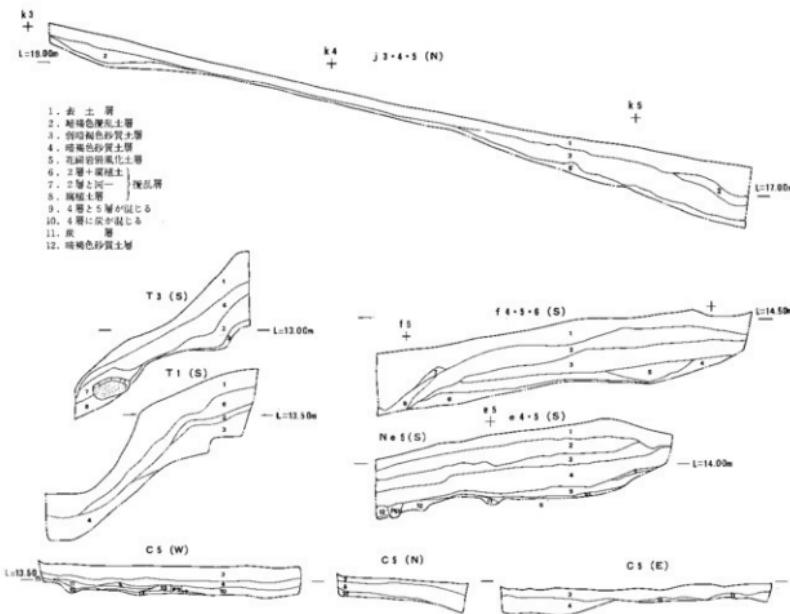
山側は、岩盤が風化した堅固な土層を削って平坦部をつくり出している。谷に面する平坦部の特に北部は削除され、遺構の一部は破壊されている。その下段は緩斜面となっており、東西部は谷筋の一部となっている。予備調査トレントI-i-5で良好な鎌倉時代の包含層が確認された区域である。

今回の調査により、下部から下段遺構群としている遺構群が検出された。これは、東南部が谷筋に面していることや、有機分を含んだバイラン土の堆積層中に形成された遺構群であるため、水の影響を受けていることから遺構の検出が困難で、当然存在するべきであるSB5の柱穴も一部確認することができなかつた。最終的には、上下2段の遺構群を確認した。しかし、上段の遺構群の南部で遺構面直上に花崗岩弱風化バイラン土層が一部堆積していた。その地点の上部に位置する尾根筋は、削平を著しく受けている。このことは、上段の遺構群が生活の場としての活動を停止したと時を同じくして、頂部で一部削平が行なわれたことを示している。頂部は、斜面部よりも立地条件には恵まれていると考えることもでき、上段遺構群とはほぼ同時期の遺構が存在していたことは充分考えられる。

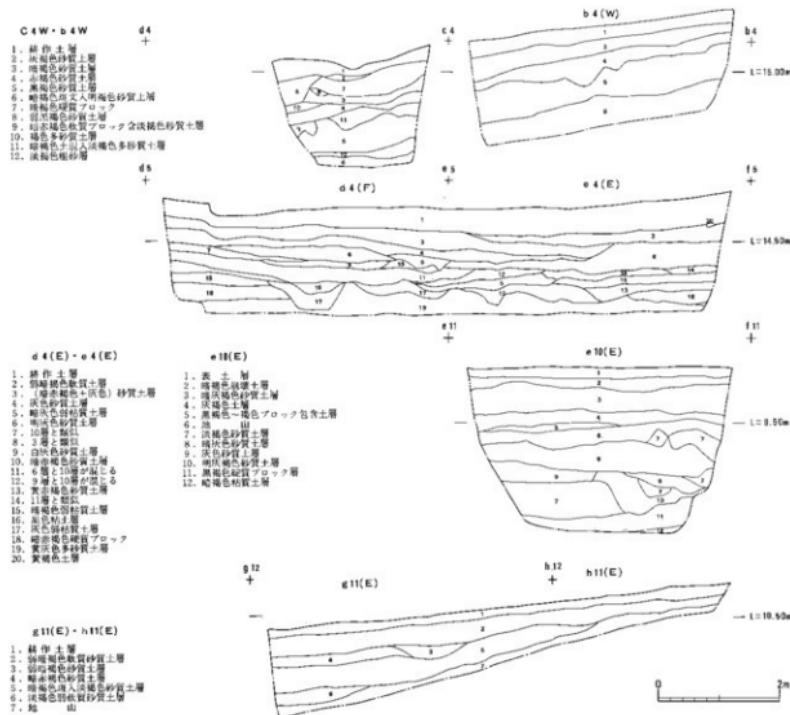
（藤好）



第2図 塩浜遺跡グリッド配置図



第3図 N区土層図



第4図 S区土層図

4 遺構

N区で南東に面する斜面部の標高10m50～13m50に位置する区域は現在、果樹等の段々畠となっている。調査の結果この段差は少なくとも中世以降、ほぼそのままの状況で今日に至っていることが判明した。検出されたのは、上下2段の生活面を有する遺構群である。以後、上段遺構群、下段遺構群とする。上段遺構群は標高約13m、下段遺構群は標高約11mに位置し、その比高差は2m程ある。遺構が立地する斜面部の南部は谷筋となっており（S区）、付近から集水し、水的資源は島内としては比較的に恵まれている。また西方の丘陵部により、冬期における季節風がさえぎられることや、東南に面することから日照の面においても生活を営む上で恵まれているとができる。

上段遺構群（図版1・2、第5・6図）

上段遺構群が位置する削平された平坦面の規模は現状で、東西6m南北25m程である。平坦面には、199個のピットが検出され、その大半は柱穴と考えられる。ピットはその組み合わせにより現状では少なくとも4棟の建物の存在が推定される。上段遺構群では、これらの建物群の他に、その南端で排水用の施設と考えられる溝状遺構が出土している。各遺構について以下説明を加えていく。

S B 1は、p 4, p 16, p 20, p 10, p 186, からなる。現状で1間×2間となり、柱穴間の距離は2.2mである。p 20の東側に並ぶと考えられる柱穴は確認できなかったが、その位置に大きな落ち込みがあり、そのため消滅した可能性が高い。落ち込み自体の性格は、東部急斜面に位置することから、後世の開墾により生じたものかあるいは、自然現象による土砂崩れと思われる。柱穴内出土遺物として、p 16より、土師器椀一細片、p 20より、サヌカイト一縦長剣片が出土した。

S B 2は、p 23, p 47, p 46, p 192, p 21, p 26, からなる。東西柱穴間の距離1.6m、南北柱穴間の距離3mを計り、現状で1間×2間の建物である。南北に並ぶ、p 23, p 47間に柱穴は存在しなかった。p 23の西側にp 26が続くがこの間は1.2mしかなく、方向的には並ぶが一連のものでない可能性もある。p 21の東側に並ぶと考えられる柱穴は、S B 1の場合と同様に落ち込みにより確認することはできなかった。柱穴内出土遺物はない。

S B 3は、p 48, p 65, p 188, p 45, からなる1間四方の建物である。南北柱穴間距離3.0m、東西間3.2m～3.4mである。柱穴内出土遺物はない。

S B 4は、p 62, p 66, p 80, p 98, p 131, p 153, p 149, p 126, p 110, p 88, p 187, p 60, からなる。1間×5間の建物で、南北柱穴間距離2.1m～1.8m、東西間3.0m～2.9mである。東西方向の柱穴、p 62, p 60及びp 153, p 149、間にS B 4に関係すると考えられる柱穴は存在しない。南北方向に異常に細長い建物である。柱穴内出土遺物として、p 66より花崗岩礫2個（直径20～30cmほどのもので根石として使われたものであろう。）、大形有溝土錐、（図版11-71 第15図-48）が出土した。

S D 1は、住居跡南西部に位置する周溝で、幅20～50cm、深さ2～10cmを計る。層位的に見ても遺構面と同一層の掘り込みであり、排水用の溝と思われる。東部斜面で削られている。出土遺物は、大形有溝土錐、（図版11-73、第15図-47）巻貝、青磁椀底部（図版12、第16図）、土師椀一小片などが出土した。

下段遺構群（図版6(1)、第15、17図）

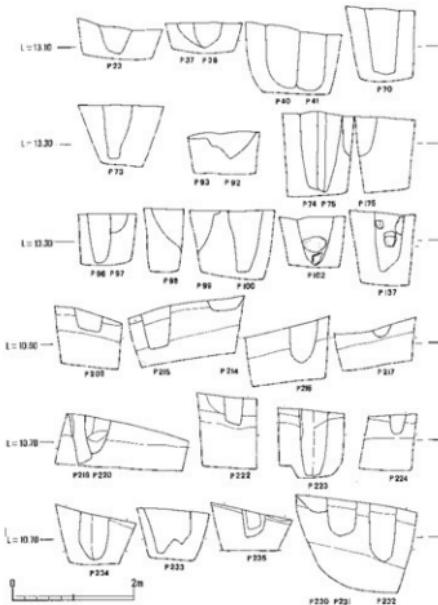
下段遺構群は、上段遺構群より約2m低く、より谷筋に近い場所に位置する。上段の遺構群と同様に、斜面を削平し、山側に排水用と考えられる溝を右する建物群である。有

S B 5は、p 214, p 222, p 233, p 234, p 236, p 216、からなる。現状では2間×3間の建物を想定される。東西柱穴間距離1.8~1.6m、南北間は途中予備調査トレンチによって切られているが、p 214~p 222間が3.0m、p 222とp 233間が1.6mとなっており、予備調トレンチ中央に柱穴が1つあったとすればほぼ1.5~1.6m間隔で並ぶ。予備調トレンチ東側に、東西70cm南北180cmほどの広がりで、焼土、炭化物及び土器細片の混合物集中箇所があり、断面を観察すると炭化物土器細片層が約5cm、その下部に焼土層が約10cmにわたって存在する。出土遺物は、焼土層より、大形有溝土錘、p 216より土鍋の細片、土師器碗の口縁部、サヌカイトフレイクが出土した。

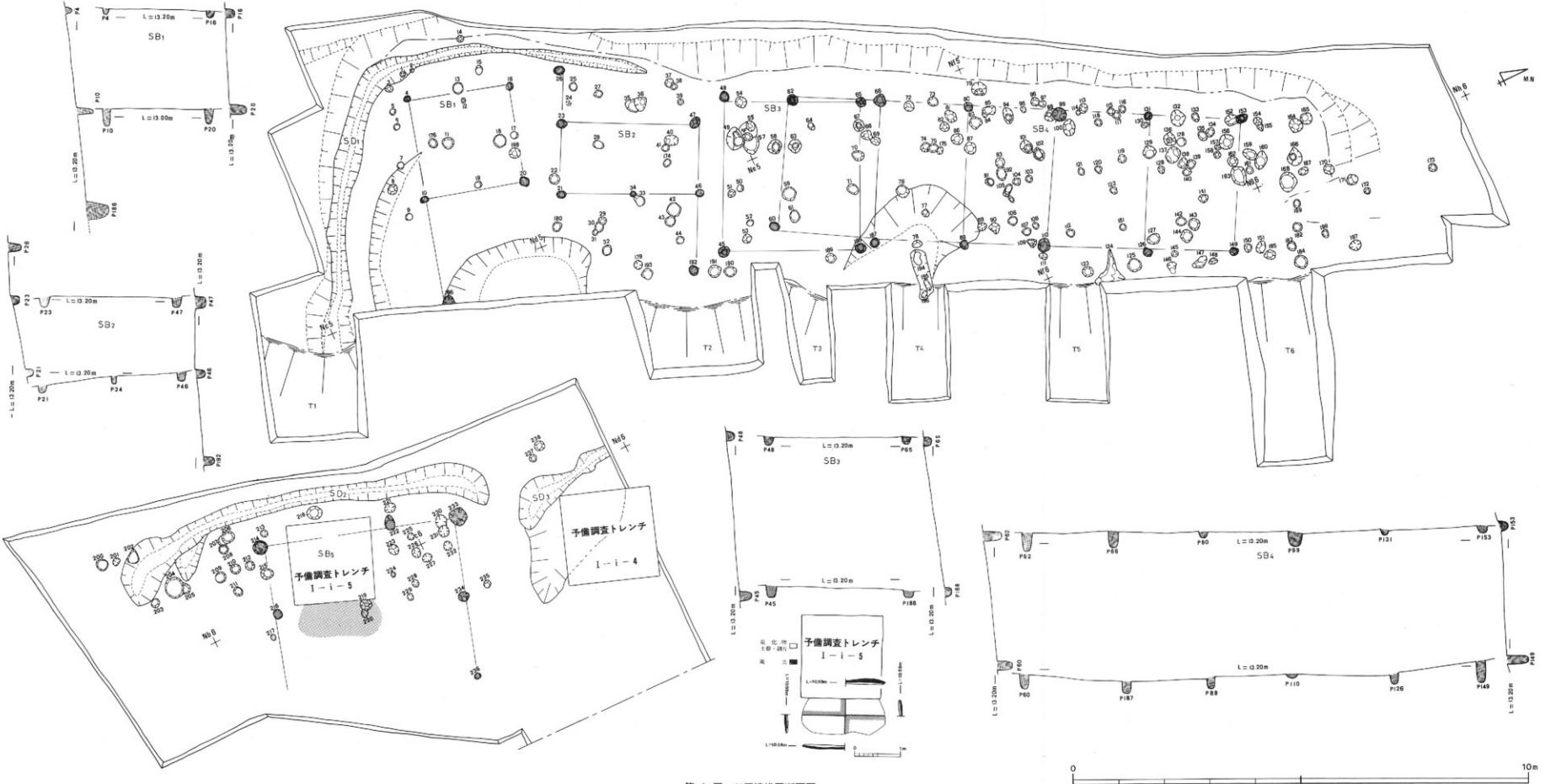
S D 2は、S B 5の山側に位置する。幅40~80cm、深さ10~15cm、長さ8mほどのもので、層的には柱穴上面と同一層からの掘り込みである。この溝もS D 1と同様に排水に利用されていたものと思われる。出土遺物として大形有溝土錘(図版11-75, 76第15図-46)、土師器碗(図版13, 第17図)、青磁碗底部(図版13-1, 第17図-1)などが出土した。

S D 3は、北側に位置し、溝の東側は大きな落ち込みがあったものと考えられる。落ち込み内には炭化物が出土したのみで、その他の遺物はなく性格は不明である。溝は落ち込みが埋った後、掘られたもので、当初北西方向に伸びるものと思われたが、段差のある所で切っていた。出土遺物は、小量の土師器小片のみである。

上段、下段住居跡の時代及び性格は、後述する出土遺物により、中世(12世紀末から、15世紀中葉)の漁民集落と考えられる。当時の住居跡規模については、上段の場合南北幅は現状とはほとんど変わらないであろうが、東西幅は後世の畠地造成により、かなりの部分が削られており、(図版3、第3図)特に北部は柱穴の出土数及び東側急斜面に接するものも数多くあり、1ないし2方向に並ぶ柱穴部が幾箇所にも見られる。(例えばp 88, p 92, p 96, p 118, p 129, の1群、p 121, p 129, p 135, p 153の1群、p 76, p 87, p 99, p 122, p 125の1群など)そのいずれもが崖面で切られた形となっており、北部は開墾による影響をより強く受けたものと考えられる。谷筋の位置とともに推測すれば、當時



第5図 ピット断面図



第6図 N区構造平面図

北部は、東方向にかなり広い平坦面を形成しうる地形であったものと考えられる。

下段の場合、南西から北東方向に伸びる谷筋に沿って柱穴が消えている点、住居跡の明確なプランがみられない点から考えると、流水の影響、特に侵食作用により消滅した可能性も考えられ、當時、どれくらいの地域に広がっていたものかは不明である。

上段、下段住居跡の時期差については、3つのケースを想定した。第1の場合、下段に平坦面を形成し住居を建て生活を営んでいた。その後徐々に谷筋の水に侵食されてきたため、上段に新しく平坦面を形成し移動した。その後近世の畠地造成により大幅な削掘を受け現在にいたった。第2の場合、上段、下段とも、同時に生活が営まれ、その後削掘を受けた。第3の場合、上段に平坦面を形成し、生活を営んでいた、その後下段に移動、削掘を受けた。以上の中で、遺物及び谷筋の位置を考慮すれば、第1のケースが該当するものと考えられる。

(白本)



第7図 下段Nb-6造構面出土焼土



第8図 作業風景

第1表 ピット一覧表

ピット 番	直径(回)	深さ(回)	遺 物	備 考	ピット 番	直径(回)	深さ(回)	遺 物	備 考
1	13	13			41	17	46		第5回(断面)
2	8	3			42	29	46	土器器・柄一細片	
3	16	7			43	20	25	土器器一細片	
4	13	14	Pit 16, 20, 10, 186と共にSB ₁ を構成		44	16	17	土器器一細片	
5	14	14			45	25	28		Pit 48, 65, 188と共にSB ₂ を構成
6	13	22			46	16	22		Pit 26, 23, 47, 192, 21,と共にSB ₂ を構成
7	18	24			47	26	25		Pit 26, 23, 46, 192, 21と共にSB ₂ を構成
8	23	27			48	22	20		Pit 65, 188, 45と共にSB ₂ を構成
9	14	55	土器器・柄一口縁部(第16回-4)		49	38	28	花崗岩塊(3個)-熱変	
10	17	38	Pit 4, 16, 20, 186, と共にSB ₁ を構成		50	15	38		
11	27	40			51	16	28		
12	10	3			52	14	20		
13	23	22			53	20	36		
14	15	9			54	24	28		
15	19	19			55	22	22		
16	19	16	土器器・柄一細片	Pit 4, 16, 20, 186, と共にSB ₁ を構成	56	21	13		
17	16	19			57	42	17		
18	29	8			58	32	54		
19	15	25			59	32	10		
20	20	37	サヌカイト一縦長削片	Pit 4, 16, 10, 186, と共にSB ₁ を構成	60	23	34		Pit 62, 66, 80, 99, 131, 132, 149, 150, 151, 152, 187と共にSB ₂ を構成
21	20	17		Pit 26, 23, 47, 46, 198と共にSB ₂ を構成	61	23	40		
22	24	17			62	23	41		Pit 62, 66, 80, 99, 131, 132, 149, 150, 151, 152, 187, 199と共にSB ₂ を構成
23	23	25		Pit 26, 47, 46, 192, 21,と共にSB ₂ を構成(第5回-断面)	63	30	48		
24	12	3			64	15	14		
25	16	9			65	23	19		Pit 48, 188, 45, と共にSB ₂ を構成
26	22	30		Pit 23, 47, 46, 192, 21と共にSB ₂ を構成	66	28	35	花崗岩塊(2個)有満玉錐(第15回-48)	Pit 62, 66, 80, 99, 131, 132, 149, 150, 151, 152, 187と共にSB ₂ を構成
27	16	14			67	25	33		
28	23	19			68	24	38		
29	18	16			69	24	55		
30	22	13	土器器一縦長削片(第5回-断面)		70	27	56	土器器・柄一細片	第5回(断面)
31	11	12	土器器・土器器(第16回-21)		71	25	50		
32	21	41	土器器・柄一細片(第16回-19)		72	23	50		
33	28	21	土器器・柄一口縁部		73	22	41		第5回(断面)
34	12	19	花崗岩塊-熱変		74	19	65		第5回(断面)
35	29	14			75	22	62	土器器・柄一細片(第5回-11縫部)(第15回-11縫部)	第5回(断面)
36	30	26			76	27	21		
37	19	24	第5回(断面)		77	15	17		
38	14	22	第5回(断面)		78	22	21	土器器一細片	
39	14	9			79	35	44		
40	32	47	土器器・柄-11縫部(第16回-5) 土器器一細片	第5回(断面)	80	20	34		Pit 62, 66, 80, 99, 131, 132, 149, 150, 151, 152, 187, 199と共にSB ₂ を構成

ピット 番 号	直徑(cm)	深さ(cm)	遺 物	備 考	ピット 番	直徑(cm)	深さ(cm)	遺 物	備 考
81	29	36			121	15	20		
82	20	56	土器器一類片(2個)		122	16	9		
83	27	24			123	23	32		
84	12	13			124				
85	29	35			125	30	18		
86	26	57			126	20	22		Pt+62, 66, 80, 90, 131, 153, 149, 126, 110, 88, 187, 60 ± 34 ± 5B ₄ ± 66B ₂
87	26	49			127	28	22		
88	19	27	Pt+62, 66, 80, 90, 131, 153, 149, 126, 110, 88, 187, 60 ± 34 ± 5B ₄ ± 66B ₂ 共にSB ₄ を構成		128	15	5		
89	20	8			129	29	41		
90	24	25			130	16	8		
91	19	36			131	19	14		Pt+62, 66, 80, 90, 131, 153, 126, 110, 88, 187, 60 ± 34 ± 5B ₄ ± 66B ₂ 共にSB ₄ を構成
92	30	10	第5図(断面)		132	34	34	有溝土器 花崗岩理(3個)一熱窓	
93	22	16	第5図(断面)		133	17	17		
94	35	20			134	17	8		
95	14	6			135	21	22		
96	20	19	第5図(断面)		136	29	3	十輪脚・鉢(図版12-3 第16図-3)	
97	16	34	第5図(断面)		137	37	57	花崗岩理	第5図(断面)
98	24	35	土器器・小皿(図版13-3, 第16図-14)	第5図(断面)	138	21	14		
99	30	7	Pt+62, 66, 80, 90, 131, 153, 149, 126, 110, 88, 187, 60 ± 34 ± 5B ₄ ± 66B ₂ 共にSB ₄ を構成		139	21	8		
100	41	49	第5図(断面)		140	17	12		
101	29	70			141	19	19		
102	30	12	花崗岩理	第5図(断面)	142	21	18	土器器・碗-底部(第16 図-6)	
103	16	2			143	26	11		
104	17	13			144	26	22	花崗岩理	
105	29	40			145	14	9		
106	20	8			146	21	42		
107	18	7			147				
108	15	19			148	20	44		
109	21	21			149	19	50		Pt+62, 66, 80, 90, 131, 153, 126, 110, 88, 187, 60 ± 34 ± 5B ₄ ± 66B ₂
110	28	9	Pt+62, 66, 80, 90, 131, 153, 149, 126, 110, 88, 187, 60 ± 34 ± 5B ₄ ± 66B ₂ 共にSB ₄ を構成		150	20	40		
111	18	9			151	32	24		
112	17	17			152	26	8		
113	20	50			153	30	17		Pt+62, 66, 80, 90, 131, 149, 126, 110, 88, 187, 60 ± 34 ± 5B ₄ ± 66B ₂
114	11	45			154	20	19		
115	16	26			155	14	8		
116	16	17			156	33	34		
117	18	30			157	12	16	土器器・小皿(図版13-2, 第16図-13)	
118	15	15	土器器・鉢-口縁部 (第16図-17)		158	14	10		
119	18	27			159	33	6		
120	16	16			160	39	6		

ピット番号	直径[mm]	深さ[mm]	遺物	備考	ピット番号	直径[mm]	深さ[mm]	遺物	備考
161	16	6			201	19	31		
162	23	8			202	34	27		
163	44	8			203	19	5		
164	30	43			204	44	26		
165	25	28			205	23	30	土印25-細片(2個) 瓦器・縫一口縫部	
166	39	39			206	27	24		
167	22	10			207	23	10	サヌカイトフレイク	
168	41	14			208	22	22	上師器・縫一細片	
169	17	15			209	23	19		第5図(断面)
170	23	15			210	24	13	土師器・羽茎一口縫部	
171	26	30			211	21	23		
172	15	5			212	20	17		
173	19	17			213	16	7		
174	15	13			214	33	13		Pt122, 229, 234, 236, 216と共にSB ₃ を構成 第5図(断面)
175	18	32	第5図(断面)		215	26	36		第5図(断面)
176	21	33			216	21	40	土師器・縫一細片	Pt124, 222, 233, 234, 216と共にSB ₃ を構成 第5図(断面)
177					217	11	11	土師器・縫一縫片	第5図(断面)
178	18	18			218	33	22	土師器・縫一細片	
179	19	14			219	25	41	花崗岩理-熱変	第5図(断面)
180	21	27			220	20	31		第5図(断面)
181	13	16			221	23	25		
182	20	38			222	32	24		Pt124, 233, 234, 216と共にSB ₃ を構成 第5図(断面)
183	20	26			223	21	55		第5図(断面)
184	30	31			224	10	17		第5図(断面)
185	23	34			225	19	14		
186	29	54	Pt14, 16, 20, 10, と共に SB ₃ を構成		226	22	8		
187	19	28	Pt162, 66, 80, 99, 131, 132, 140, 141, 110, 88, 60 と共にSB ₃ を構成		227	23	4		
188	24	17	Pt148, 65, 45と共にS B ₃ を構成		228	16	11		
189	20	24			229	13	21		
190	27	32	土師器・縫一口縫部(第 16図-18)		230	29	15	瓦・瓦片(共高7-8) 土師器・縫一口縫部 (共高14-15)・(共高12-9)・(共高1-5)	第5図(断面)
191	26	25			231	24	31		第5図(断面)
192	20	35	Pt26, 23, 47, 46, 21と と共にSB ₃ を構成		232	24	49		第5図(断面)
193	25	25			233	37	38	土師器・縫一縫片 土師器・縫一口縫部(2 枚)・サヌカイトフレイク	Pt124, 222, 234, 236, 216と共にSB ₃ を構成 第5図(断面)
194		27	瓦(近代)		234	20	40		Pt124, 222, 233, 236, 216と共にSB ₃ を構成 第5図(断面)
195		45	瓦(近代) 白磁		235	22	23		第5図(断面)
196		32	花崗岩理		236	16	10		Pt124, 222, 233, 234, 216と共にSB ₃ を構成
197	26	9			237	17	14		
198	26	20			238	22	17		
199	16	10							
200	25	24							

5 遺 物

塩浜遺跡A地区は地形の差からN区とS区に2分して調査区を設定した。S区においては遺構や良好な包含層の存在を認めることはできなかった。ここではN区の上下二段に分かれて検出された遺構群において柱穴や溝及び遺構面直上から出土した遺物を中心としてその上層から出土した遺物や、遺構が検出されなかった他のグリッド及びS区から出土した遺物で補足し、A地区の遺物について説明を加えていくこととする。なお、古銭については12点出土し、その内判読可能な10点を表7に示す。

(1) 漁 具

イ 土錘の分類（表6）

表6は塩浜A地区より出土した土錘計測値一覧表である。表中の軸長測定箇所は表6内の図で示す。復原重量は、残存率及び残存重量より推定したもので、±5%ほどの誤差は含む。

出土した土錘は総数288点、全すべて、管状及び、有溝土錘である。

管状土錘は、重量及び形態により以下の5種に分けた。

- I 小形で表面がなめらかに加工されているもの、以下小形管状土錘Aとする。（第13図-1～8、図版9-(2)）
- II 小形で表面に指頭による凹凸があるもの、以下小形管状土錘Bとする。（第13図-9～16、図版9-(1)）
- III 大形で穴の径が小さいもの、以下大形管状土錘Cとする。（第15図-50、54、図版9-(4), 41, 44, 45, 46）
- IV 大形で穴の径が大きいもの、以下大形管状土錘Dとする。（第15図-49, 52、図版9-(4), 42, 43）
- V その他（第15図-51, 53、図版9-(4), 40, 48）

有溝土錘の場合は、第11図の度数分布図及び形態により、以下3種に分けた。

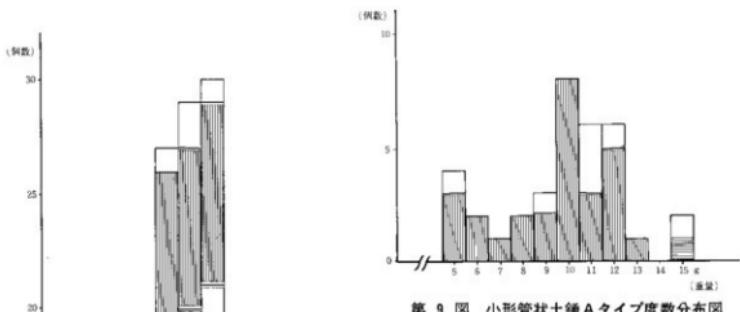
- I 重量分布が0～150gの範囲にあるもの、以下小形有溝土錘とする。（第13図-17～27、図版9-(3)）
- II 重量分布が200～750gの範囲にあるもの、以下大形有溝土錘とする。（第13～15図-28～48、図版10, 11～71～73, 75, 76）
- III 4孔を有するもの（第15図-55、図版9-(4), 49）

以上の中で、出土点数の多い小形管状土錘A・B、小形及び大形有溝土錘について、第9図～12図、表2～5に度数分布図と出土層を示し、重量分布及び時代差について考察する。

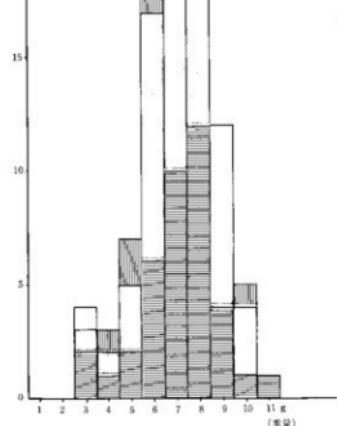
ロ 重量分布と出土層について

表2～5は、出土層によって別けた各タイプの土錘の個数及び全体に占めるパーセントを表わしている。（ ）内は出土遺物のうち、残存部分より、完形の重量を復原することが可能なものの個数及びパーセントであり、度数分布図第9～12図は、復原重量の分布を図化した。出土層は凡例のように分けた。表土層、近世擾乱層は、現代、近世に擾乱を受けたもので、上部包含層は、中世以後の擾乱層である。遺構面直上とは、住居跡直上に存在した旧表土層と考えられるもので、遺構と同一時期の遺物包含層であり、ピット・溝は、その内の埋土を表わす。

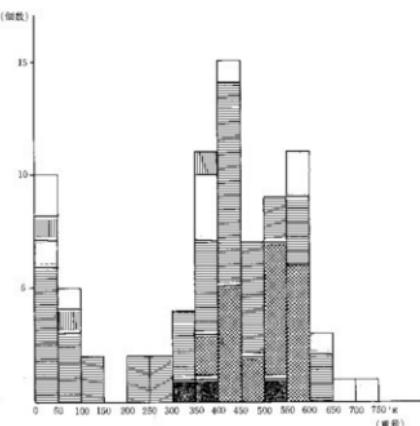
1. 小形管状土錘A（第2表度数分布第9図、）出土点数は36点、出土位置は谷筋に位置する。
S b - 4, S c - 4, 5, S d - 4, 6 グリッドで全体の52%のものが出土している。ほ



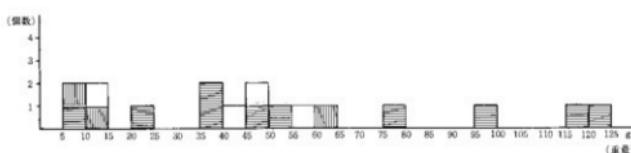
第9図 小形管状土錘Aタイプ度数分布図



第10図 小形管状土錘Bタイプ度数分布図



第11図 小形、大形有溝土錘度数分布図



第12図 小形有溝土錘度数分布図

表 土 層	
近世擾乱層	■
上部包含層	□
遺構面直上	○
Pit溝	▨
不明	□
凡例	

小形管状土錘A(表面なめらかなもの)

	全個数	%
表 土 層	27(27)	75(77)
近世攪乱層	1(1)	3(3)
上部包含層	1(1)	3(3)
不明	7(6)	19(17)
計	36(35)	100(100)

第 2 表

小形管状土錘B(指頭痕のあるもの)

	全個数	%
表 土 層	34(29)	27(25)
近世攪乱層	49(46)	38(39)
上部包含層	41(39)	32(33)
不明	4(4)	3(3)
計	128(118)	100(100)

第 3 表

小形有溝土錘

	全個数	%
表 土 層	3(2)	14(12)
近世攪乱層	2(1)	9(6)
上部包含層	14(11)	63(64)
不明	3(3)	14(18)
計	22(17)	100(100)

第 4 表

大形有溝土錘

	全個数	%
表 土 層	2(1)	2(2)
近世攪乱層	14(8)	15(12)
上部包含層	43(32)	47(47)
遺構面直上	24(21)	27(32)
Pit, 溝	7(3)	8(5)
不明	1(1)	1(2)
計	91(66)	100(100)

第 5 表

とんどのものが表土層から出土しており、近現代に使用されていたものと考えられる。重量は5~15gの範囲にあり、10~12gのものが多い。

- 小形管状土錘B(第3表、度数分布第10図) 出土点数は128点、数的には最も多く出土している。出土位置は、全地域にわたってほぼ均等な出土を示し、一部の地域にかたまる傾向は見られない。層的には、表土層~上部包含層の各層からほぼ同じ比率で出土している。重量的には3~11gの範囲にあり、とりわけ6~8gのものが多く、各層についても同様な傾向を示している。このことは、ある時代を通して、同一な使用目的のため、この種の土錘の製作がつけられたことを示すものと考えている。
- 小形有溝土錘(第4表、度数分布第12図) 出土点数は22点、平面的には谷筋に位置するSb-4, Sc-5, Sd-4・5, Se-5・6グリッドで全体の70%が出土している。層的には、表土層~上部包含層までの遺物で、上部包含層に全体の63%が出土している。重量的には、8~120gまでの幅広いものになったが、8~15g, 35~65gのものが多い。
- 大形有溝土錘(第5表、度数分布第11図) 出土点数は91点、平面的には、住居跡出土グリッドに全体の52%が出土している。層的には、上部包含層に最も多く全体の47%が出土している。また遺構面直上より24個(第14図-34~45, 図版11-(1), ピット, 溝より7個(第15図-46~48, 図版11-(2), 71~73, 75, 76)の出土が見られ、時代を限定できるものは、この種のものだけである。

全体の重量幅は212~717g、遺構面直上及びピット、溝からの出土に限ると325~584gの幅を持って分布している。表土層~近世攪乱層までに出土したものと、遺構面直上へピット、溝より出土したものの分布を比較すると、多少ピークを示す位置がずれるが、前者の上限及び下限に、後者は完全に含まれる様相を示しており、ほぼ同一の重量分布を示す集団内の差と考えられる。分布の幅からすると、重量差があり、幾種類かの網に用いられたものか、同一種類の網

に用いられ装着場所によって意識して重量を変えたものかのいずれかであろう。

ハ 土錘と使用された網について

1. 小形土錘、出土した層位等を考慮に入れると、ほぼ同一の重量分布を示す小形土錘は、小形有溝土錘→小形管状土錘B→小形管状土錘Aへの変遷が考えられる。使用された網について⁽¹⁾は、香川県歴史民俗資料館に保管されている資料中に類例が見られ、手縫網、立網に小形管状土錘A、小形有溝土錘と重量及び形も同一のものが装着されていた。小形管状土錘Bについても重量的に見て、ほぼこの種の規模の小さい網に使用されていたと考えてまちがいないものであろう。
2. 大形有溝土錘について、資料館に保存されている、近代の鰯の大網に装着されているものと類似しており、香川県歴史民俗資料館の高橋克夫氏によれば、瀬戸内海の鰯漁に用いられた網は400年ほどの歴史を持つ。規模は、大正14年与島で最後に使われた大網で、全長300~350m、40~50人の人手を必要としている。資料館に保存されている大網の土錘は、大形管状土錘及び大形有溝土錘で、有溝のものは、本遺跡出土の大形有溝土錘の重量分布内におさまり、管状のものにしても、重量的にはほぼ同一のものと思われる。次に、大網、地こぎ網で鰯漁を行う場合、まずカズラ網で魚群を集める。カズラ網といっても、全長400mぐらゐのカズラ繩とよばれる太い網に、大石、土錘、及びブリ木とよばれる板切れ及びカズラ樽とよばれる浮子をつけたものである。この両端を船で引きまわすことで、大石、土錘が海底の泥をまき上げ、ブリ木が水中でゆれ、水中に煙幕をめぐらしたようになり、これに鰯がおびえて中央にかたまるそうで、広域の鰯を網で囲める範囲内に集めることを目的にした漁具である。本遺跡出土の4孔を有する有溝土錘(第15図-55、図版9-(4)49.)は、このカズラ網に用いられている物と重量及び形態とも酷似したものであった。装着方法は、土錘の両側面を通る2本の網を、孔を通した細紐で固定するものである。他の遺跡の類例を見ると、有溝土錘で1孔~4孔を持つ土錘は、和歌山市閔戸遺跡(古代末~中世)⁽²⁾で1孔、3孔のもの、兵庫県姫路市加茂遺跡(室町)⁽³⁾で4孔のもの、広島県福山市草戸千軒町(中世)⁽⁴⁾で1孔のもの、櫃石島カンド遺跡(中世遺構)⁽⁵⁾で4孔のものが出土している。

いずれも瀬戸内に面した遺跡で、時代は中世に属する。

与島における鰯漁の歴史は、与島、小瀬島付近に金手の磯と呼ばれ、かつては内海有数の鰯の漁場があった。18世紀中頃の漁場の利権が高松藩に移行するまでは与島の人名が網元として⁽⁶⁾鰯漁を実施していた。このことから島民は、漁果をもとに流通経済の中に組み込まれていたことは充分考えられる。

本遺跡の遺構面直上及びピット・溝より出土した大形有溝土錘は、他の遺構面直上出土の遺物より、12世紀後半より15世紀中葉に位置するものと考えられる。遺構面直上出土の土錘が鰯漁という集団を必要とする漁労の網に確実に使用されたか、否かは現段階の資料では必ずしも充分とは言えない。この問題は瀬戸内海沿岸における漁業のあり方のみならず、流通といった経済上の問題にもかかわってくるものである。今後の資料の蓄積を待ちたい。

(白本)

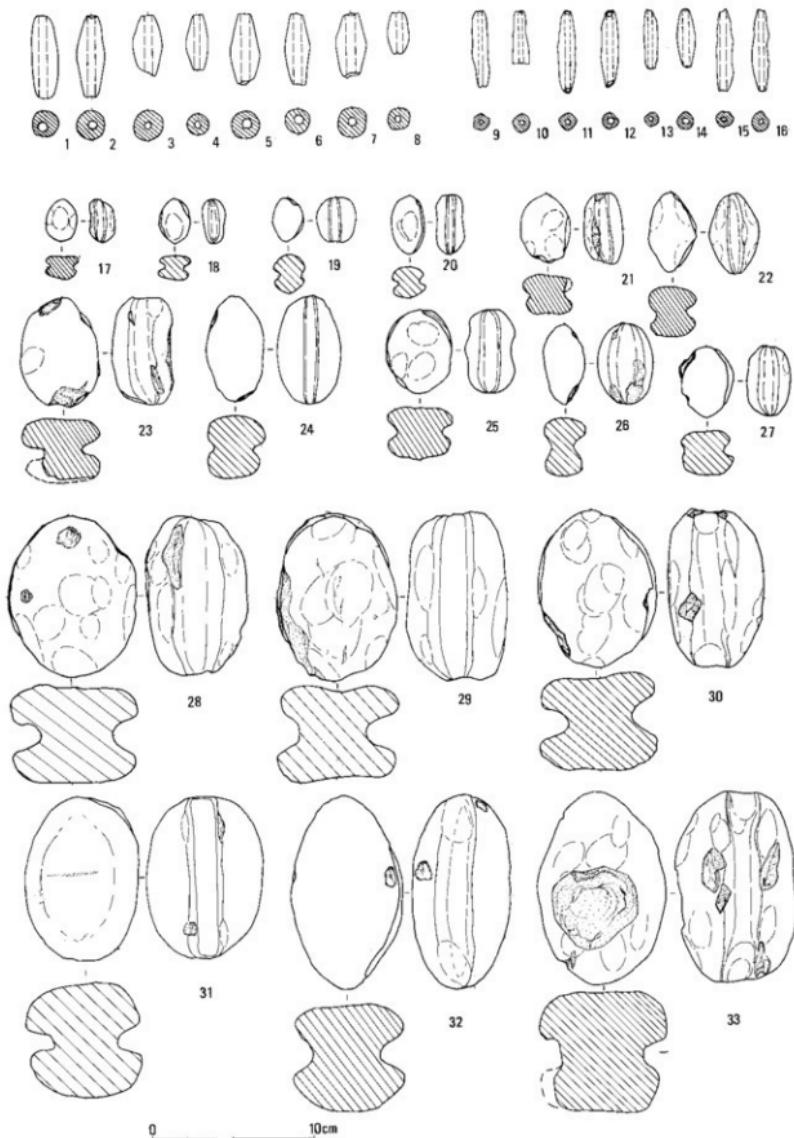
注

(1) 全長4~5mの小形の網で、磯の小魚を捕獲する小規模な漁労に使用されていたものである。

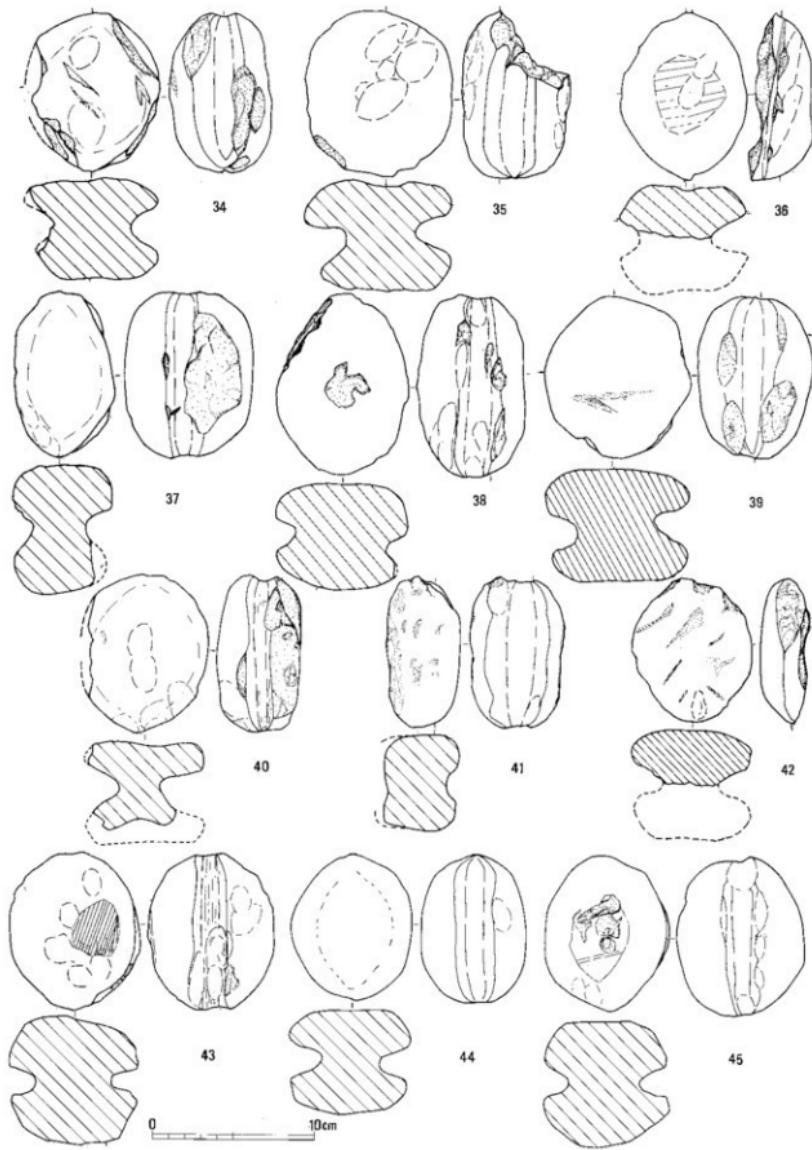
(2)~(4) 大野左千夫、1978「有溝土錘について」『古代学研究86』

(5) 香川県教育委員会「がんと遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報』

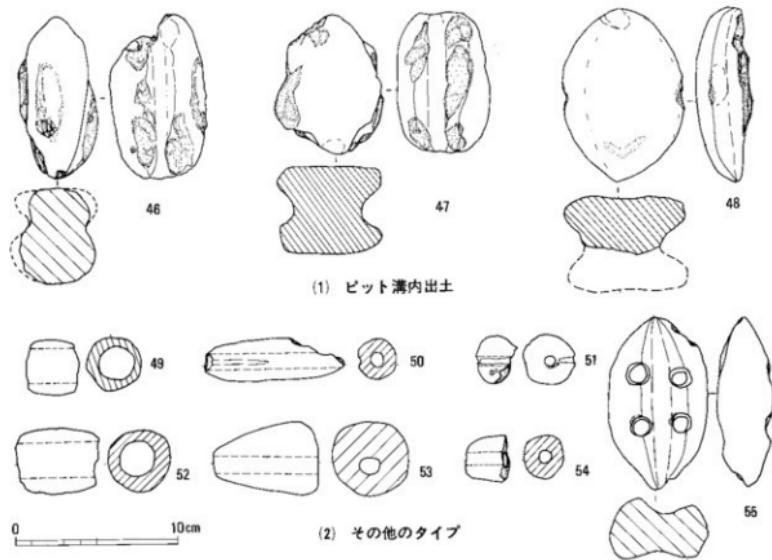
(6) 香川県歴史民俗資料館、高橋克夫氏の御教示による。



第13図 土種実測図（表土層～上部包含層出土）



第14図 土錐実測図（遺構面直上出土）



第15図 土錠実測図

(2) 土 器

上下二段の遺構群から出土した遺物を中心に報告する。

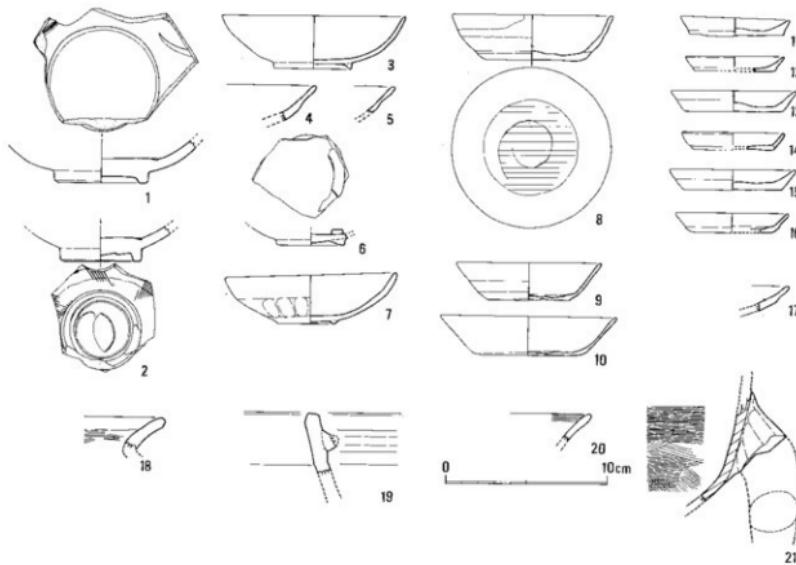
イ 上段遺構群（図版12, 13 第16図）

上段遺構群は斜面を削平し、平坦な面の山側にめぐらした溝状遺構とその内部に位置するピット群からなる。ピット群はその大半が獨立柱の柱穴と考えられる。上段遺構群から出土した土器は、小片もしくは細片が多く、図化できたものは、図中の20点である。

1. S D 1 から出土した青磁碗の底部である。高台外面まで、緑灰色の釉がかかっている。高台部は削り出しにより成形されており、高台内面の削りは平坦である。器壁の厚みは、高台部が、体部の器壁厚をしのいでいる。施文としては、内面に削り出しによる沈線と、柄状の器具により平行な沈線文が削り出されている。龍泉窯系の青磁であると考えられる。

2. 遺構面直上から出土した青磁柄の底部である。体部下半の一部まで、やや黄色がかかった緑灰色の釉がかかっている。体部外面に柄状の器具による平行な削り出し沈線が走っている。内面にもわずかに沈線があるのが認められる。削り出しにより成形された高台を有する。器壁厚は、体部が高台部をしのいでいる。他の出土した青磁の高台の削り出しとは異なり、高台内部の中央を浅く、高台に近い周囲を深く削り出している。胎土は1や、他の青磁と比較して、生目細かいものである。

3～7. 土師碗である。いずれも高台がつく。3はp 136から出土したもので、器表の剥落が著しく、細部の調整は確認できない。全体的に丸味を帯びた外形を呈する。高台は断面が三角



第16図 上段遺構群出土・土器実測図

形のものでやや退化した感をうける。4はp9、5はp40から出土したもので、いずれも口縁部が一度屈曲して立ち上がるるものである。6はp142から出土したもので、断面三角形の高台を有する。内面に粘土紐が付着したまま焼き上げられたものである。土器完成後、同一器種のものを重ねた痕跡とも考えられる。7は遺構面直上から出土したもので、高台部は非常に退化しており、径も小さく、断面三角形を呈する。器形は、3と同じく全体的に丸味を帯びており、口縁部はヨコナデによる調整を施しているが、体部下半は成形時の指頭圧痕をそのまま残している。

8～10. 土師質の様である。8はp30より出土、他は遺構面直上から出土したものである。いずれも平底で直線的にのびる口縁部を有する。底部は笠切りの技法よりなる。8は口縁部がわずかに内側に彎曲している。底に板の正目の痕跡が認められる。9、10は非常に薄い器壁を有するもので、前者はやや小形のものである。

11～16. 土師質の小皿である。11はp30、12はp75、13はp157、14はp98、他は遺構面直上から出土したものである。底部はいずれも笠切りである。11、13は底部内面の中央部が盛り上がり、周辺が薄くなっている口縁部へつづくものと、15のように底部内面が平坦なものがある。

17. 土師質の小皿である。p118から出土した。11～16とは異なり、明瞭な平底とはならぬものであろう。

18. 土師質の鍋の口縁部である。p190から出土した。口縁端部はヨコナデ、下部は刷毛による調整を施している。

19. 土師質の釜である。p32より出土した。やや内傾する口縁部を有するものがある。

20. 瓦器椀の口縁部である。遺構面直上より出土した。灰白色の色調を呈し、焼しきは口縁部外面の上部と、内面の上端のみに施される。

21. 土師質の鍋もしくは釜の脚である。p31から出土した。内面は目の密度が異なる刷毛による調整を施し、脚自体は指頭による調整を行っている。

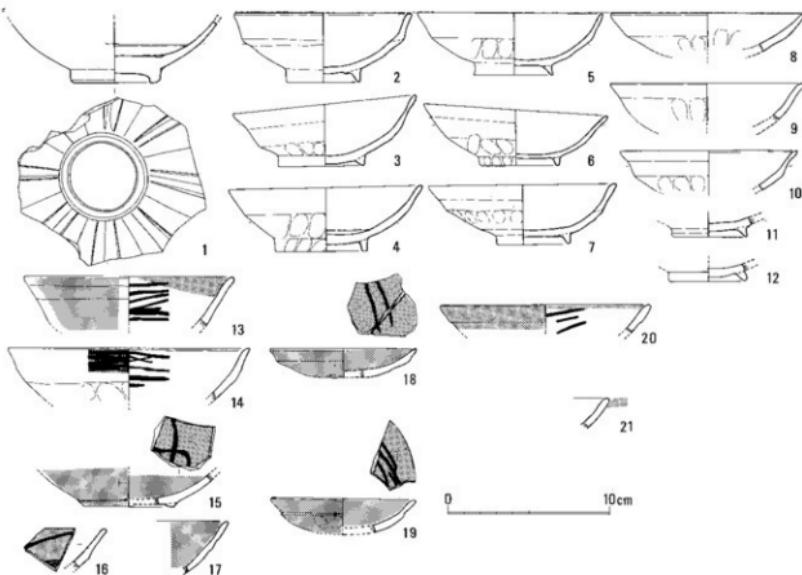
ロ 下段遺構群（図版13、第17図）

下段遺構群は上段遺構群と同じく、斜面を平坦に削平し、その平坦面の山側にめぐらる溝状遺構（SD2）とその内部に位置する大半が柱穴と考えられるピット群からなる。出土した土器の多くは小片で22点図化した。

1. 青磁椀の底部がある。SD2から出土した。淡い緑灰色の釉が、高台部の内面以外の全面にかかっている。高台部は削り出しで成形されている。削り出しはそれほど深くなく、底部の厚さが胴部の器壁の厚さをしのいでいる。外面に段違いに蓮弁文が浮かし彫りにされている。胎土はやや生目が荒い感を受ける。龍泉窯系の青磁であろう。

2～12. 土師質椀である。2、8、9、11、12はSD2、5はp230より、他は遺構面直上より出土したものである。いずれも比較的安定した高台を有する。体部中央に傾斜の屈曲点がある。それより上部の口縁部は、ヨコナデによる調整が施されているが、下半は成形時における指頭圧痕をそのまま残す。色調は、3が暗褐色を呈するが、他は淡褐色を呈する。高台はいずれも粘土紐の貼付による。上段遺構群から出土した第16図-3、7と比較すると、口縁径では、それほどの差は認められないが、口縁部の屈曲の程度や、高台のつくり等においては明確に差があり、下段遺構群から出土した椀の方がしっかりした高台を有する。

13～17. 瓦器椀である。いずれも遺構面直上から出土した。13は口縁部で、外面全体と内面の口縁端部に、焼しきが施されている。口縁部外面と内面はなめらかな調整が行なわれているが、



第17図 下段造構群出土・土器実測図

外面の体部は成形時のままで明確な器面調整は施されていない。内面に暗文が施されている。色調は灰白色を呈し、他の出土瓦器と比すると、精良な作りのものである。14は椀の口縁部である。内外とも全面を焼している。口縁部外面は笠状の器具で、ていねいに横方向に調整しているが、それより下部は成形時の指頭痕を残す。口縁端部内面には一条の沈線を意識したとも思える窪をつかった浅い条痕がつく。内面に暗文が認められる。15は底部である。内外面ともに焼している。高台は断面三角形を呈し難な貼付によっている。外面は成形時のままの指頭圧痕を残すが、内面はなめらかに調整しており、螺旋にまわると考えられる暗文がつく。16、17ともに口縁部で、いずれも小片のため復原できない。16は内面のみ、17は内外面ともに焼している。17は内面がかなり磨耗しているが、16では内面に暗文が認められる。外面の口縁上部のみ、ていねいな調整が施されており、下部は成形時の指頭痕が残っている。

18、19. 瓦器小皿である。いずれも口縁部のみヨコナデによる調整を施すためか、段になつて口縁部が立ち上がる。底に近い部分は成形時の指頭痕が残る。両者ともに内外面ともに焼されており、内面に暗文が施される。

20、21. 瓦器椀の口縁部である。暗文が存在することと、焼されていることにより瓦器とした。両者は口縁部の上部と内面の口縁端に焼しが認められる。口縁部のみヨコナデによる器壁の調整が行われていることは注目される。色調は13~19とは異なり灰白色を呈し、須恵器の焼成がやや甘いもののような感をうけ識別可能なものである。20には内面に暗文が認められる。

ハ 遺構外から出土した土器（図版15、第18図）

1. S区の谷筋から出土した青磁楕の底部である。高台外面まで青灰色の釉がかかっている。見込み部に「卍」の文様が入っている。高台部内面は平坦に削り出されている。削り出しは浅い。龍泉窯系の青磁と考えられる。

2. 土師質の小皿である。下段遺構群の上部の包含層中から出土したものである。底部は範切りによる。底部内面は盛り上がり、薄くなつて口縁部につづいている。

3. 瓦器の口縁部である。器壁が厚く、雑なつくりである。外面には成形時の指頭痕がそのまま残り、内面はナデによりなめらかにしているが、方向が一定しない雑な刷毛目がつく。おそらく盤になるとされる。

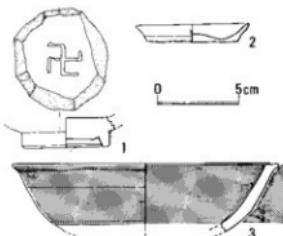
実測図はのせなかつたが、図版14の亀山焼の楕の底部、片口の口縁部等が出土している。

上段遺構群と下段遺構群とは、青磁、瓦器の存在や、口縁部が段を有して立ち上がる楕が存在するなど共通する要素が多く見い出されるが、細かく見ていくと、下段遺構群には存在しない外形が丸味を帯び、高台部がかなり小形化してきているものも存在する点など異なる点も認められる。上段遺構群中の溝SD1が下段遺構群の中央部へ流れ込む方向を有して途切れるなど、上段遺構群と下段の遺構群とが同時に存在したとは考えられないことからその中には時間的な差が反映していることも考えられる。

そして遺物で量的に恵まれ、しかも時期的な特徴の変化がその中に見い出されるものに土師質の楕形土器がある。下段遺構群から出土した楕（第17図-2～12）はすべて口縁部は段を有して立ち上がり、高台は貼付による高く、しっかりしたものである。これに対して上段遺構群の楕ではピット内出土のもの（第17図-4～6）は下段と共に通する様相を有しているが、遺構面上から出た楕（第17図-7）やピット出土の楕（第17図-3）の口縁部は段を有さず丸味を帯びたまま口縁端部につながるものであり、しかも高台部は径も小さく、断面三角形の矮小化したものである。遺構の状態からして少なくとも3小期に区分できること、しかも第16図-7の楕は遺構面上より出土したことにより上段遺構群の最終期に伴う可能性が強い土器である。このことは上下2段の遺構群の同時存在が考えられない検出状況からすると、下段遺構群が上段遺構より先行するものであるとすることができる。

青磁も、破片ではかなり出土したが、そのほとんどが楕である。高台の削り出しの程度が浅いところからするとほぼ全部が鎌倉期に属するものと考えられる。高台の削り出し具合、胎土、釉調などに差がある。SD1（第16図-1）、SD2（第17図-1）及びS区谷筋（第18図-1）から出土した3点はいずれも高台部内面を平坦に削り出し、やや生目が荒く、緑灰色を中心とする袖調を呈するものである。これに対し上段遺構面上から出土した青磁楕（第16図-2）は高台内面の高台よりのところを深く削り出し、生目の細かい胎土を用い、やや黄色気味の袖を用いている。また外面には櫛状の器具を用いた平行沈線の施文がみられる。前者は龍泉窯系、後者は同安窯系の青磁であろう。S区谷筋から出土した青磁楕（第18図-1）には、見込みに「卍」の文様が入っている。

瓦器はいずれも小片もしくは細片でN区の上下2段の遺構群を中心として出土した。焼しが施されている部分の差、焼されていない部分の焼付・色調により3種に分かれる。下段遺構面



第18図 遺構以外出土・土器実測図

直上から出土した椀（第17図-13）は他の出土した瓦器と比較すると良好なつくりで焼していない部分は灰白色を呈し、堅致なものである。椀と小皿（第17図-14～19）は16をのぞいて全面を焼している。やや軟質のものである。下段遺構面柵（第17図-20）と上段遺構面柵（第16図-20）は、共に須恵器の焼成の甘いものに類似した焼成であるが、口縁部のみに燃しを施すことや、第17図-20は内面に暗文があるなど瓦器を意識したものである。以上の3種ともに共通している点は外面は口縁部のみをヨコナデ等により調整を施すが、下半は成形時の指頭圧痕を残すものである。鎌倉期のものであろう。第16図-20、第17図-20の瓦器椀は、香川県綾歌郡に所在する西村遺跡^{注5}、坂出市府中町に所在する讃岐国府跡^{注6}からも出土しており注目される。遺物からすると下段遺構群は鎌倉時代、上段遺構群は鎌倉～室町時代に比定することができよう。

注

- (1) 坂出市櫛石島がんど遺跡において同様な椀が出土している。しかし特徴的な凹み底の椀は塩浜遺跡においては認められなかった。香川県教育委員会「がんど遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報』1980・3
- (2) 志道和直「草戸千軒町遺跡出土の土師質土器編年試案」『草戸千軒』No.48 千軒
- (3) 横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心にして」『九州歴史資料館研究論集4』1978
- (4) 高槻市教育委員会「上牧遺跡発掘調査報告書」『高槻市文化財調査報告書』第13冊、1980・2
橋本久和「中世土器の地域色とその流脈」『考古学研究』第27卷第2号、1980・9
- (5) 香川県教育委員会「西村遺跡」「一般国道32号綾南バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」1980・3
- (6) 香川県教育委員会、昭和55年度讃岐国府の発掘調査で井戸の一括遺物として出土。

(3) 石 器（図版15、第19図）

塩浜遺跡A地区は、中世の集落の存在が、予備調査の時点から考えられていた。しかし与島全体が量の多少の差こそあれ旧石器の散布地であると言ってもあながち過言ではない。A地区においても中世の遺構面から旧石器等の石器が出土した。原位置を保って出土したものはない。

1. サヌカイト質のナイフ形石器である。S区の谷筋から出土した。石器自体は白色に風化し、断面形が台形状を呈する。刃部の調整を除けば、国府型ナイフ形石器の要素を充たしている。主要剥離面のポジティブ面に、底面からとプランティング面からの打撃による細かな調整が施されている。先端部を普通のナイフ以上に意識して鋭利にしたものである。

2. サヌカイト質の舟底形石器である。N区の上部包含層中から出土した。国府型ナイフの刃部にさらにプランティングを施した舟底形石器である。鋭利な刃部は残していない。刃部に施した調整を除けば、国府型ナイフの要素をすべて充たすものである。風化の程度は低い。

3. サヌカイト質の有舌尖頭器である。S区谷筋の耕作土層から出土した。全面を押圧剥離で成形したものである。ほぼ完形の雄品である。風化の程度は低い。

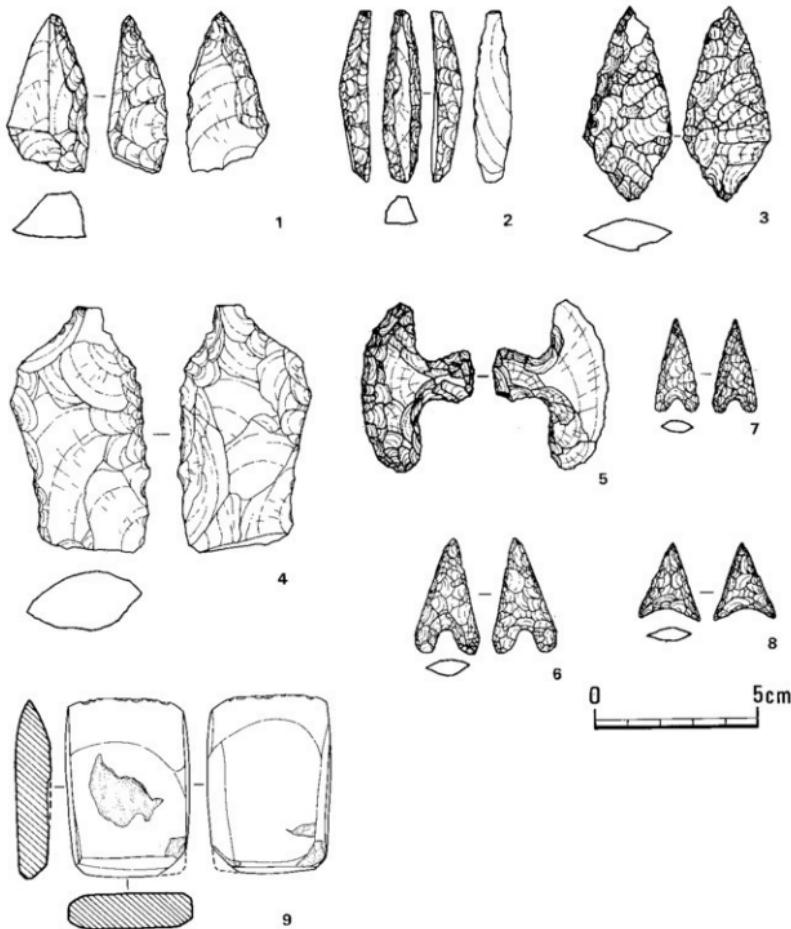
4. サヌカイト質の石匙である。S区谷筋で出土した。雑な荒い打撃によって成形している。素材は不定形の横長の剥片である。

5. サヌカイト質の石匙である。S区谷筋より出土した。板状の剥片を素材としたもので、刃部に相当する面は片方の面からのみの打撃によって形成されている。

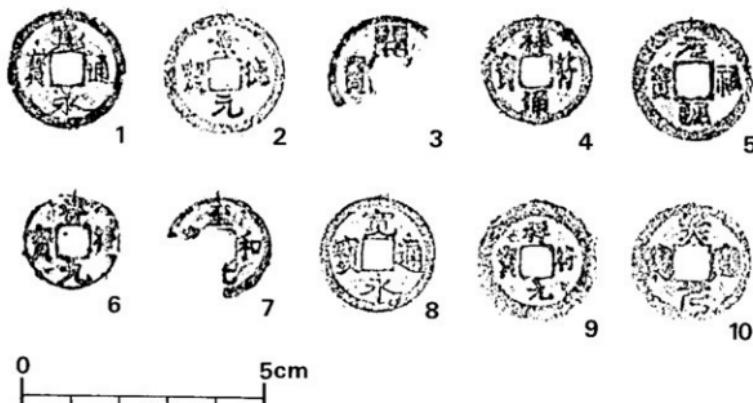
6～8. サヌカイト質の石鎌である。いずれもS区谷筋より出土した。凹基式の石鎌で、6, 7はとくに基部の抉りは深い。

9. 結晶片岩系の板状に剥離する石材を利用した扁平片刃石斧である。N区の上部包含層中から出土した。全面を研磨した雄品である。

(藤好)



第 19 図 石器実測図



第20図 古銭拓影図

第7表 出土古銭一覧

	出土地点 · 層位	錢種	初鑄年(西暦)
1	A N b - 5 · 表土層	寛永通宝	日本 寛永 13 年(1636)
2	A N b - 5 · 遺構直上面	景德元宝	北宋 景德元年(1004)
3	A N b - 6 · 近世擾乱土層	開元通宝	唐 武德 4 年(621)
4	A N c - 5 · Pit 230内	祥符通宝	北宋 大中祥符元年(1008)
5	A N d - 4 · 近世擾乱土層	元祐通宝	北宋 元祐元年(1086)
6	A N e - 5 · 上部包含層	祥符元宝	北宋 大中祥符元年(1008)
7	A N f - 7 · 表土層	至和元宝	北宋 至和元年(1054)
8	A N f - 8 · 上部包含層	寛永通宝	日本 寛永 13 年(1636)
9	A N o - 8 · 近世擾乱土層	祥符元宝	北宋 大中祥符元年(1008)
10	A N 不明	熙寧元宝	北宋 熙寧元年(1068)

6 おわりに

昭和51年度に実施した予備調査により、塩浜遺跡の本調査発掘対象地が決定された。塩浜遺跡と総称される遺跡は与島の中央部からやや南西部によった位置にあり、西方の丘陵から派生して舌状にのびる低平な台地とその縁辺の部分からなる。遺跡はA・B・Cの3地区にわかれ、A地区は台地の東南斜面部とその南につらなる谷筋の部分からなる。B地区はA地区とは台地の尾根を境として西北の斜面部であり西方の丘陵とに、はさまれた谷筋に面する。B地区はA地区と谷筋をひかえる斜面部である点は共通するが、日照や冬期の季節風の面で条件的に恵まれておらず、昭和54年度末に行なった調査においても遺構や良好な包含層の存在は認められなかった。C地区は台地の先端部周辺で、二条の谷筋の合流点である。C地区は後述するので、ここではA地区についてのまとめを記すこととする。

A地区は、予備調査のトレンチI-i-5から土師器・瓦器・輸入磁器が出土しており、鎌倉時代と推定される良好な包含層の存在が認められた。予備調査の結果“本グリッド（I-i-5）の南に約13mの地点に湧水があり、この湧水のまわりに住居が當まれたものと思われる”とされた。谷筋の南の斜面部は傾斜が急であり、遺構が立地するには無理な地形であるため、谷筋及びそれに接する北部の緩斜面部に調査の範囲を限定することができた。調査区のはば中央部に小さな道がありその南部がほぼ谷筋であるためS区とし、道の北部の緩斜面部をN区とした。S区の調査は借地をしての調査のため、調査後、元どおりに復旧する必要があり発掘区が地割に制約されたことと、谷筋であるための集水や湧水のため調査の進行や掘り下げ、及び土層の堆積状況の把握等の面で非常に困難なものであった。予備調査の見解もあり、S区で生活用水を得るために施設の存在も予想された。しかし調査の結果、遺構の存在は認めることができなかった。ただ谷筋であるため、周囲から水を集めることにより、遺構が削られていることも考えられないでもないが、土層の堆積状況等からして、施設と呼べるほどのものは当時においても存在していなかった可能性が強い。S区の調査を通じて、出水に閉口したことや、集水点付近においては戦前まで谷水田が當まれていた点などから、生活用水としては不足のないものである。

N区では標高11mから13mの斜面部から上下2段に別れる形をとつて掘立柱よりなる建物群が検出された。本文中前述した例に従つて上段遺構群及び下段遺構群とする。両者ともに斜面部を水平に削平し、山側に侵水を防ぐとともに排水の機能を有した溝をめぐらす共通した構成を有している。

上段遺構群が立地する削平された平坦面は現状で6m×25mの幅の狭いものである。そこから検出されたピット群はほとんどが柱穴と考えられるもので、4棟の建物の存在が確認された。SB1をのぞけば他の建物は、重複して同時に存在し得ないものこそあれ、柱穴の間隔、方向等の面で共通する点が多い。まず建物の方向は平坦面の山側の側縁と一致し、いずれも梁間が1間で3mを計る。特にSB3は1間四方であり、SB2はSB3の東西方向の柱間に中央に柱があるものである。30cmを1尺とする10尺もしくは5尺が1間となるものである。SB4は桁間と梁間が異なり、梁間が1間で3mありこれも10尺とすることができる。桁間は5間で、1間が約2mあり7尺とすることができるであろう。このことからするとSB1は1間×2間の建物であり、1間が2.2mを計る。SB4の桁間の1間とは異なるがほぼ7尺とすることが

できよう。SB1とSB2～4は、建物の方向が異なるため、同一時期のものではない可能性が強い。SB3の内部に炭化物が集中した箇所であることから、この建物は住居であろう。SB1～4以外にも一定の方向をもって並ぶピット群が数列あり、上段遺構群の北部は土層の状況からしても、後世の畑地造成のため削除されている度合が高いと考えられる。建物の規模は確認できなかったが、数棟の建物は存在していたと考えられる。それらの建物は、SB1～4のいずれとも方向が異なることから、時期的にずれるものであろう。少なくとも3回以上の建て替えが行なわれている。上段の削平された平坦面には狭い面を最大限に利用して建物が存在し、間合いが異なる1間×5間の建物等がその一時期には建っていたことが判明した。

下段遺構群のSB5は、下段の土層は非常に判別が難しく、柱穴を完全に検出することはできなかつたが、2間×3間となる可能性が高い。1間がほぼ1.5～1.6mであり、これも1間が5尺の建物とすることがきよう。中央部の焼土中から大形有溝土錐が出ており、焼土も厚く広いものである。住居の可能性が高い。上段の遺構群の施設であるSD1が下段遺構群のはば中央部に流れ落ちる方向で延びており、しかも下段遺構群中からSD1の延長上と考えられる溝は認められないことから、両者は同時に存在したものあり得ない。

上段遺構面直上から出土した土師質の椀（第16図-7）の高台は径も小さく、高台も断面三角形を呈する小形化したものである。これに対して、下段から出土した椀（第17図-2～12）は高く、しっかりした高台を有するものである。下段遺構群の方が古い様相を呈しているとすることができる。このことは、下段遺構群から上段遺構群へと生活の場が移ったことを示している。上段遺構群の遺構面直上に花崗岩の弱風化バイラン土が堆積している。これは上段遺構群の地山の土であり、上段遺構群はこの土が堆積したと同時に生活の場ではなくなつたとすることができる。遺跡が立地する低平な台地の頂部はかなり広い平坦面であり、畑地でかなり削平され遺構は認められなかつたが、斜面部以上に良い立地条件を示すものとすることができる。当然本來は、この頂部の平坦面にも建物が存在したものと考えられる。上段遺構群の遺構面直上に堆積していた花崗岩弱風化バイラン土は頂部の建物の建築等のために削平された土ではなかろうか。

塩浜遺跡A地区から出土した大形有溝土錐は、鰯網用のものと考えられる。与島の東南に位置する金手の瀬と呼ばれ、かつては瀬戸内有数の鰯の漁場を中心として鰯漁が行なわれたことは想像に難くない。出土した青磁・瓦器・北宋銭は、鎌倉ないし室町期に、この地域が漁業のみを行なっていたかは別にしても鰯漁をもとに経済的な流通に組み込まれていたことを示すものであろう。

今後瀬戸内における関連した遺跡調査による資料の蓄積がまたれる。出土した土錐については、瀬戸内海歴史民俗資料館の高橋克夫氏にご教示をいただいた。記して、謝意を表したい。

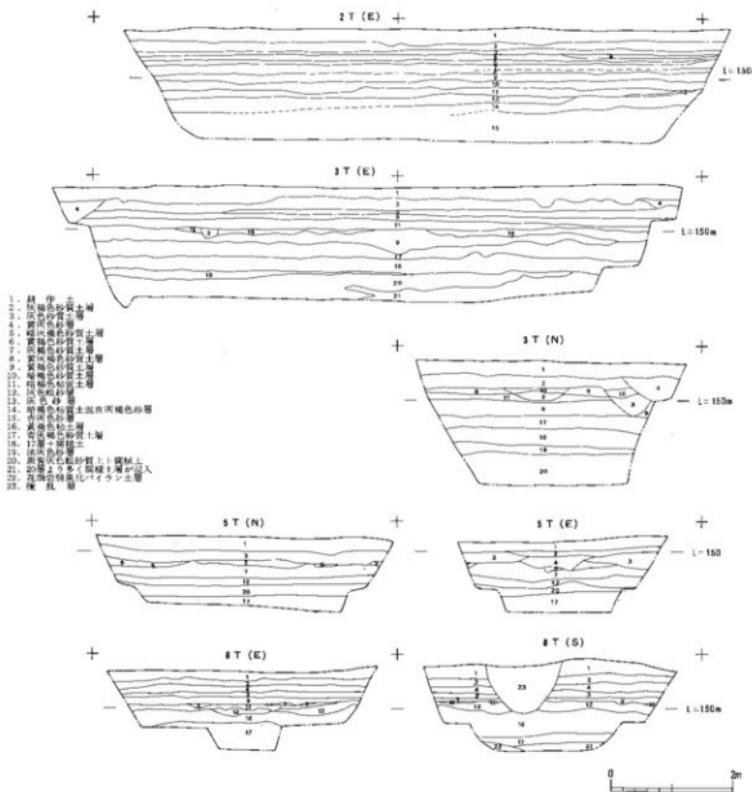
昭和55年1月7日から開始した塩浜地区の本調査は、B地区・C地区・A地区的順で調査を行なった。B・C地区的調査、C・A地区的調査は、一時に重複して行なつた。立地条件の中で、B地区的調査により、日照と冬期の季節風を避けることが重要な要素となることが確認できたものである。C地区は、昭和54年夏、一部調査を実施し、縄文時代後期の包含層が確認された。出土した土器がそれほど磨耗していないこと等で、調査区の近くに、集落跡の存在が予測された。そこで、塩浜A地区、B地区が立地する低平な舌状台地の先端の頂部は、予備調査で削平されていることが判明しているので、台地先端の縁辺にトレンチを設定して調査を実

施した。台地先端の第8トレンチや、舌状台地と西方丘陵間の谷筋の末端に位置する第1トレンチ、第2トレンチなどでは、表土下60cm、標高1.5mで暗褐色粘質土層（第22図）があり、また、その下部の黄褐色粘土層からは、青磁片が出土した。暗褐色粘土層の高さは、前記トレンチで共通しており、堆積時のC地区は静かな湿地状を呈していた可能性があり、下部の粘土層中から青磁が出土したことにより、中世以降の時期の所産である。これは、A地区で検出された鎌倉から室町の塩浜地区における海岸面の位置等を考える上で資料となるものである。第2トレンチでは、他のトレンチでは黄褐色粘質土層の下層に相当する暗褐色粘質土混在灰褐色砂層中から、脚台付の製塙土器が出土している。第23図-2、3（C地区土器実測図）がそれで、いずれも二次的に熱を受けたものと考えられ、器表の剥落が著しい。その下層は、グラウイ化して青灰色を呈する粘質あるいは、砂質土層となる。この層からは、前回の調査同様に、繩文後期初頭の土器群（第23図-1）が出土する。この層からは、流木等の植物遺体が検出され、広島大学総合科学部の安田喜憲先生に花粉分析をお願いした。調査区の状況は、前回と全く同様であり、遺構の存在は認められなかった。第4トレンチ・第5トレンチでは、表土層より下部では砂質土もしくは砂層となり、台地よりのトレンチの土層とは大きく異なるものであり、かなり後世まで海岸線となっていたことを示していると考えられ興味深い。

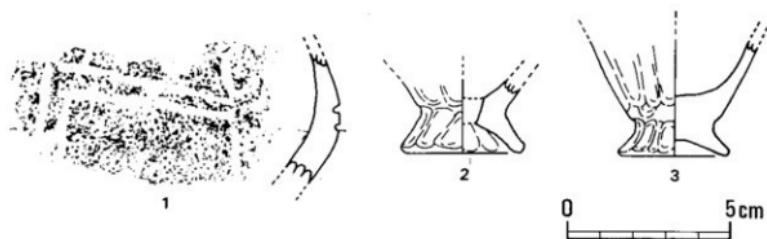
（藤好）



第21図 塩浜C地区花粉分析サンプル採集作業



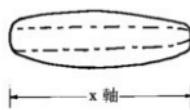
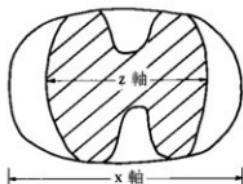
第22図 塩浜C地区土層図



第23図 塩浜C地区土器実測図

第6表 土錐計測値一覧表

～軸長測定位置～



() は推定復原値

No.	遺構層序	形態	残存率	残存重量g	復原重量g	軸長			実測図	写真
						x	y	z		
1	Sb-4表土層	小形管状土錐A	1	12	12	5.1	1.6		第13図-1	
2	Se-3不明	#	1	12	12	5.1	1.7		# 2	
3	Se-4表土層	#	1	10	10	4.0	1.8		# 3	図版9-22
4	Se-9表土層	#	1	5	5	3.5	1.4		# 4	図版9-26
5	Sc-4表土層	#	1	10	10	4.5	1.7		# 5	図版9-19
6	Nc表土層	#	1	10	10	3.4	1.3		# 6	図版9-17
7	Sc-5表土層	#	1	10	10	3.8	1.8		# 7	図版9-23
8	Nc-4不明	#	1	5	5	2.5	1.2		# 8	図版9-25
9	Sd-3不明	#	1	11	11	5.0	1.7			
10	Sb-6表土層	#	1	12	12	5.0	1.7			
11	Sc-4表土層	#	1	12	12	4.8	1.6			
12	Sd-6表土層	#	1	10	10	4.8	1.6			
13	Sb-6表土層	#	1	9	9	4.6	1.4			
14	Sb-4表土層	#	1	11	11	5.0	1.7			
15	Sd-6表土層	#	1	10	10	4.7	1.5			図版9-15
16	Sg-11表土層	#	1	8	8	4.3	1.5			図版9-16
17	Sd-3不明	#	1	11	11	4.8	1.6			図版9-18
18	Ne-2・3表土層	#	1	9	9	4.1	1.4			図版9-20
19	Se-3不明	#	10	11	3.8	1.8				
20	Sh-15表土層	#	1	8	8	3.8	1.7			図版9-21
21	Ne-5表土層	#	1	5	5	3.7	1.2			図版9-24
22	Nc-4不明	#	9							
23	Nd-7表土層	#	1	12	12	4.7	1.3			
24	Ne-5表土層	#	5	6	(3.5)	1.1				
25	Ng-3表土層	#	6	7	4.0	1.2				
26	Nd-6近世擾乱層	#	12	15	4.5	1.2				
27	Ne-4上部包含層	#	12	15	3.2	1.9				
28	Sd-3不明	#	1	9	9	4.6	1.5			
29	Sb-4表土層	#	1	11	11	4.5	1.5			

No.	造構層序	形態	残存率	残存重量g	復原重量g	軸長			実測図	写真
						x	y	z		
30	S d - 6表 土 層	小形管状土錐A	10	8	11	(4.5)	1.5			
31	S e - 5表 土 層	小形管状土錐	10	6	12	(5.0)	1.8			
32	S b - 6表 土 層	#	10	4	10	(5.0)	1.5			
33	S c - 5表 土 層	#	10	5	10	4.5	(1.5)			
34	S g - 15表 土 層	#	10	5	13	(5.5)	1.6			
35	S g - 11表 土 層	#	1	5	5	3.5	1.2			
36	S d - 7表 土 層	#	1	6	6	3.2	1.3			
37	S g - 15上部包含層	小形管状土錐B	1	7	7	4.6	1.0		第13図-9	
38	N f - 5上部包含層	#	10	4	7	(5.0)	1.0		#	10
39	N g - 5-6表 土 層	#	1	8	8	5.0	1.0		#	11
40	N g - 5-6表 土 層	#	1	7	7	4.5	1.0		#	12
41	N g - 5-6表 土 層	#	1	5	5	3.7	1.0		#	13
42	N g - 5-6表 土 層	#	1	6	6	3.5	1.2		#	14
43	S h - 5近世擾乱層	#	1	8	8	5.3	1.0		#	15 図版9-6
44	S e - 5近世擾乱層	#	1	8	8	5.0	1.0		#	16 図版9-9
45	S b - 4上部包含層	#	1	8	8	5.1	1.1			図版9-1
46	N f - 6近世擾乱層	#	1	9	9	5.5	1.1			図版9-2
47	S e - 2近世擾乱層	#	1	8	8	5.0	1.0			図版9-3
48	N g - 5近世擾乱層	#	10	5	6	(5.0)	0.9			図版9-4
49	S g - 15上部包含層	#	10	7	8	5.2	1.1			図版9-5
50	N e - 2上部包含層	#	1	8	8	5.1	1.0			図版9-7
51	S h - 15近世擾乱層	#	1	8	8	4.8	1.0			図版9-8
52	S h - 14上部包含層	#	1	8	8	5.0	1.2			図版9-10
53	N d - 6上部包含層	#	1	8	8	4.7	1.2			図版9-11
54	N a - 1上部包含層	#	1	7	7	4.7	1.0			図版9-12
55	N d - 7表 土 層	#	1	6	6	3.7	1.0			図版9-13
56	N e - 4上部包含層	#	1	25	25	3.7	0.7			図版9-14
57	N a - 5上部包含層	#	1	9	9	5.3	1.1			
58	S b - 4近世擾乱層	#	1	8.5	8.5	5.6	1.1			
59	N i - 8上部包含層	#	1	7	7	5.5	0.9			
60	N f - 8近世擾乱層	#	1	9	9	4.8	1.2			
61	N l - 9近世擾乱層	#	1	10	10	5.5	1.2			
62	S e - 5上部包含層	#	1	8.5	8.5	5.4	1.1			
63	N f - 8上部包含層	#	1	9	9	5.3	1.1			
64	N e - 5上部包含層	#	1	7	7	4.5	0.9			
65	N o - 9近世擾乱層	#	1	10	10	5.1	1.2			
66	N f - 5上部包含層	#	1	8	8	5.1	1.1			
67	N o - 8-9不明	#	1	7	7	4.9	1.0			
68	N f - 7近世擾乱層	#	1	8	8	4.7	1.1			

No.	遺構層序	形態	残存率	残存量	原重量g	軸長			実測図	写真
						x	y	z		
69	N i - 9 近世擾乱層	小形管状土錐B	1	8	8	4.7	1.2			
70	N e - 6 近世擾乱層	#	10	6	7	(5.0)	0.9			
71	N i - 9 上部包含層	#	1	7	7	4.3	1.0			
72	N a - 1 上部包含層	#	10	6	7	(4.5)	0.9			
73	N a - 1 上部包含層	#	1	6	6	4.2	1.0			
74	N a - 1 上部包含層	#	1	6	6	4.1	1.0			
75	N a - 1 上部包含層	#	10	6	7	(5.0)	0.9			
76	N i - 9 表土層	#	10	6	7	(4.0)	1.1			
77	N e - 2 近世擾乱層	#	1	5	5	4.4	1.0			
78	N d - 2 表土層	#	10	6	7	5.0	1.1			
79	N e - 5 近世擾乱層	#	10	5	6	4.5	0.9			
80	N e - 7 上部包含層	#	10	5	6	(5.0)	1.1			
81	N o - 8 近世擾乱層	#	10	5	6	(5.0)	1.0			
82	N o - 9 近世擾乱層	#	10	4	5	(5.0)	1.1			
83	N l - 4 表土層	#	10	5	6	(4.5)	1.0			
84	N a - 1 上部包含層	#	1	3	3	3.0	0.9			
85	N f - 8 近世擾乱層	#	10	4	7	(4.5)	1.0			
86	N o - 8 近世擾乱層	#	10	3	6	(5.0)	1.0			
87	N c - 4 上部包含層	#	10	4	8	5.0	1.0			
88	N d - 4 近世擾乱層	#	10	3	6	4.5	1.0			
89	N o - 9 近世擾乱層	#	10	5	10	(5.0)	1.0			
90	N e - 4.5 不明	#	10	4	7	(4.0)	1.0			
91	N a - 1 表土層	#	10	4	7	(4.0)	1.0			
92	N e - 4.5 不明	#	10	3	6	(4.0)	1.0			
93	N f - 8 近世擾乱層	#	10	3	6	(3.5)	1.0			
94	N e - 7 表土層	#	10	4	8	3.5	1.2			
95	N a - 6 不明	#	10	5	8	3.5	1.1			
96	N a - 1 上部包含層	#	10	4	6	(3.5)	0.9			
97	N f - 8 近世擾乱層	#	10	3	6	(3.5)	1.0			
98	N a - 1 上部包含層	#	10	3	8	(4.0)	0.9			
99	N e - 2 表土層	#	10	2	5	3.5	0.8			
100	N d - 4 表土層	#		2						
101	N b - 3 表土層	#		2						
102	N j - 3 表土層	#		2						
103	S g - 15 上部包含層	#	1	8	8	4.9	1.0			
104	S g - 15 表土層	#	1	8	8	5.0	1.1			
105	S d - 7 表土層	#	1	8	8	5.0	1.0			
106	S d - 7 表土層	#	1	8	8	4.8	1.0			
107	S g - 12 表土層	#	1	7	7	5.1	0.9			

No.	遺構層序	形態	残存率	残存量g	復原量g	軸長			実測図	写真
						x	y	z		
108	S h - 5 近世擾乱層	小形管状土錐B	1	7	7	5.1	1.0			
109	S g - 15上部包含層	"	1	6	6	4.7	1.0			
110	S h - 15近世擾乱層	"	1	7	7	5.3	1.0			
111	S g - 15上部包含層	"	16	9	11	(6.0)	1.2			
112	S a - 2 上部包含層	"	16	7	8	(5.0)	1.1			
113	S e - 11近世擾乱層	"	16	7	8	4.6	1.1			
114	S b - 5表 土層	"	1	6	6	4.7	0.8			
115	不明 近世擾乱層	"	1	7	7	4.9	1.0			
116	S e - 11近世擾乱層	"	1	7	7	4.6	1.1			
117	S h - 4表 土層	"	1	8	8	4.7	1.0			
118	S e - 11表 土層	"	16	5	6	4.5	0.9			
119	S e - 11表 土層	"	16	5	6	(4.5)	1.0			
120	S h - 15近世擾乱層	"	16	5	6	4.2	1.0			
121	S g - 15上部包含層	"	1	6	6	4.9	1.0			
122	S e - 11近世擾乱層	"	1	7	7	4.6	1.1			
123	S e - 11近世擾乱層	"	1	6	6	4.5	0.9			
124	S h - 15上部包含層	"	1	7	7	4.6	1.1			
125	S h - 5表 土層	"	1	6	6	3.9	1.2			
126	S h - 4表 土層	"	16	7	10	5.5	1.2			
127	S h - 15近世擾乱層	"	16	6	7	(4.5)	1.1			
128	S h - 15近世擾乱層	"	16	7	9	5.5	1.0			
129	S d - 5上部包含層	"	16	7	10	(6.0)	1.2			
130	S h - 15近世擾乱層	"	16	6	9	(5.0)	1.2			
131	S c - 4表 土層	"	1	6	6	3.5	1.0			
132	S g - 15上部包含層	"	16	6	7	(4.5)	1.1			
133	S e - 9表 土層	"	16	6	8	4.6	1.1			
134	S c - 1上部包含層	"	16	6	9	(5.0)	1.2			
135	S g - 5近世擾乱層	"	16	6	9	(5.0)	1.2			
136	S h - 14近世擾乱層	"	16	6	9	(5.0)	1.1			
137	S b - 5近世擾乱層	"	16	6	9	(5.0)	1.1			
138	S c - 1上部包含層	"	16	5	8	(4.5)	1.2			
139	S h - 14近世擾乱層	"	16	4	8	(5.0)	1.1			
140	S e - 11近世擾乱層	"	16	4	7	(5.0)	1.0			
141	S f - 6近世擾乱層	"	16	4	8	(4.5)	1.0			
142	S b - 4上部包含層	"	16	4	8	4.5	1.1			
143	S e - 11近世擾乱層	"		2			1.1			
144	S h - 14近世擾乱層	"		2			1.0			
145	S c - 5表 土層	"	16	4	6	(4.5)	0.9			
146	S d - 4表 土層	"	16	4	8	(5.0)	1.0			

No	造構層序	形態	残存率	残存量g	倒原量g	輪長			実測図	写真
						x	y	z		
147	S e - 9 表 土 層	小形管状土錐B	1/6	4	7	(4.0)	0.9			
148	S d - 7 表 土 層	"	1/6	5	7	(4.0)	1.1			
149	S d - 7 表 土 層	"	1/6	3	3	3.0	0.9			
150	S b - 5 表 土 層	"	1/6	3	4	(4.0)	0.9			
151	S b - 6 近世擾乱層	"	1/6	4	6	4.5	0.9			
152	S h - 14 近世擾乱層	"	1/6	3	4	(4.0)	0.9			
153	S g - 15 上部包含層	"	1/6	3	4	(4.5)	1.0			
154	S g - 15 上部包含層	"	1/6	3	5	(4.0)	1.1			
155	S h - 15 近世擾乱層	"	1/6	4	7	(4.5)	1.1			
156	S b - 5 近世擾乱層	"	1/6	2	3	(4.0)	0.8			
157	S g - 12 上部包含層	"	1/6	3	5	(5.0)	1.1			
158	S e - 11 近世擾乱層	"	1/6	3	6	(4.0)	1.0			
159	S g - 15 上部包含層	"		3			1.0			
160	S h - 15 近世擾乱層	"	1/6	2	5		1.0			
161	S g - 15 上部包含層	"		3			1.0			
162	S e - 5 近世擾乱層	"		3			0.9			
163	S g - 12 表 土 層	"		2			1.0			
164	S g - 12 表 土 層	"		1						
165	N f - 5 上部包含層	小形有溝土錐	1	9	9	2.5	2.0	1.6	第13図-17	図版9-38
166	N g - 5-6 表 土 層	"	1	8	8	2.5	1.8	1.2	"	18 図版9-39
167	S b - 4 表 土 層	"	1	14	14	2.8	2.0	2.5	"	19 図版9-37
168	S e - 3 不明	"	1	14	14	3.7	2.0	1.8	"	20 図版9-36
169	S c - 5 上部包含層	"	1/6	34	38	4.5	3.1	2.3	"	21 図版9-32
170	S d - 4 上部包含層	"	1	35	35	5.0	2.9	3.0	"	22 図版9-33
171	S d - 5 上部包含層	"	1/6	105	117	6.8	4.8	(4.0)	"	23 図版9-27
172	S d - 7 上部包含層	"	1	98	98	6.8	3.6	4.0	"	24 図版9-28
173	N g - 5-6 表 土 層	"	1	64	64	5.0	3.8	2.6	"	25 図版9-30
174	S e - 5 上部包含層	"	1/6	38	48	5.1			"	26 図版9-31
175	S e - 9 近世擾乱層	"	1/6	42	47	4.4	3.5	2.8	"	27 図版9-34
176	N b - 5 不明	"	1	58	58	5.6	2.6	3.6		図版9-29
177	N f - 5-6 上部包含層	"	1/6	19	21	3.6	2.1	2.2		図版9-35
178	S c - 2 上部包含層	"	1/6	60	120	7.5	4.5	4.0		
179	S d - 4 上部包含層	"		65						
180	S c - 1 上部包含層	"		46						
181	S c - 1 上部包含層	"	1/6	31	78	6.3	3.7	(3.0)		
182	S d - 4 上部包含層	"	1/6	27	54	4.3	3.5	3.0		
183	S e - 5 不明	"	1/6	17	43	4.1	3.0	(3.0)		
184	S e - 6 上部包含層	"		20						
185	S d - 4 上部包含層	"		32						

No.	遺構層序	形態	残存率	残存重量g	復原重量g	軸長			実測図	写真	
						x	y	z			
186	S e -11近世攪乱層	小形有溝土鉢	/	12	/	/	/	/			
187	S e -1上部包含層	大形有溝土鉢	1	474	474	10.1	7.9	6.0	第13図-28	図版10-61	
188	N f -5上部包含層	/	1	475	475	10.5	7.7	5.7	/	図版10-62	
189	S g -14上部包含層	/	1	410	410	10.0	7.4	5.8	/	図版10-60	
190	N b -4.5 N e -4.5 畦上部包含層	/	1	534	534	9.8	6.6	6.7	/	図版10-64	
191	N f -5上部包含層	/	1	470	470	12.4	7.0	6.0	/	図版10-53	
192	N地区不明	/	呑	645	717	11.6	7.7	7.1	/	図版10-59	
193	N g -6遺構面直上	/	呑	430	538	10.0	(8.5)	5.5	第14図-34	図版11-69	
194	N e -4遺構面直上	/	呑	526	584	10.6	8.9	5.7	/	図版11-67	
195	N b -5遺構面直上	/	呑	293	586	10.0	7.5	(7.0)	/	図版11-68	
196	N c -5遺構面直上	/	呑	502	558	10.0	6.2	8.0	/	図版11-69	
197	N e -5遺構面直上	/	1	570	570	11.2	8.0	6.5	/	図版11-68	
198	N e -6遺構面直上	/	1	580	580	10.2	8.9	6.7	/	図版11-68	
199	N b -6遺構面直上	/	呑	370	529	9.8	(7.5)	(6.5)	/	図版11-68	
200	N e -5遺構面直上	/	呑	284	355	9.3	(6.0)	5.7	/	図版11-68	
201	N e -4遺構面直上	/	呑	184	460	8.9	7.3	(5.0)	/	図版11-68	
202	N e -5遺構面直上	/	1	569	569	9.5	8.0	7.8	/	図版11-65	
203	N b -6遺構面直上	/	1	429	429	9.0	7.2	6.1	/	図版11-70	
204	N e -5遺構面直上	/	1	525	525	9.6	7.4	7.8	/	図版11-66	
205	N e -5下段、溝S D ₂ 内	/	呑	260	325	9.5	6.0	5.3	第15図-46	図版11-75	
206	N e -4上段、溝S D ₁ 内	/	呑	321	357	8.4	6.5	5.3	/	図版11-73	
207	N e -4 Pit	66内	/	呑	250	500	11.0	7.0	(6.0)	/	図版11-71
208	N f -5 Pit	132内	/		290	/	/	/		図版11-72	
209	N e -5下段、溝S D ₂ 内	不明	/		40	/	/	/			
210	N e -4上段、溝S D ₁ 内	不明	/		20.5	/	/	/		図版11-74	
211	N e -5下段、溝S D ₂ 内	大形有溝土鉢	/		84	/	/	/		図版11-76	
212	N f -5上部包含層	/	呑	414	460	10.4	7.5	5.9		図版10-63	
213	N f -5上部包含層	/	1	385	385	10.8	7.1	5.8		図版10-54	
214	N f -5上部包含層	/	呑	310	344	10.1	6.3	5.1		図版10-55	
215	N f -5上部包含層	/	呑	302	336	9.6	(6.0)	(5.1)		図版10-56	
216	S g -14上部包含層	/	呑	360	400	9.9	(6.0)	6.0		図版10-57	
217	N b -5上部包含層	/	1	221	221	8.5	5.2	5.3		図版10-58	
218	N f -5遺構面直上	/	呑	216	540	11.3	7.9	(6.0)			
219	N f -5遺構面直上	/	呑	322	358	10.2	6.2	5.6			
220	N f -5遺構面直上	/	呑	169	423	10.4	7.0	(6.0)			
221	N g -6遺構面直上	/			90	/	/	/			
222	N e -4遺構面直上	/	呑	232	464	9.3	7.6	(6.0)			
223	N d -4遺構面直上	/			86	/	/	/			
224	N g -5.6 畦表土層	/	呑	189	378	8.8	6.3	(5.0)			

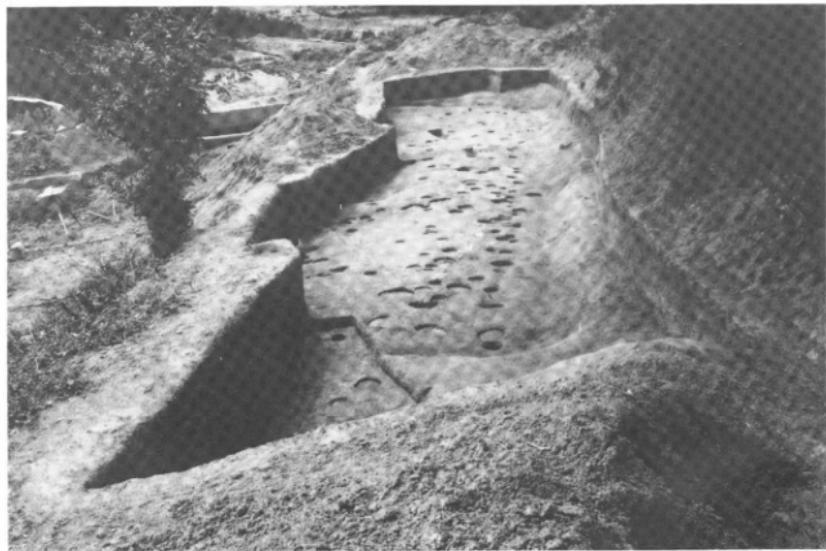
No.	遺構層序	形態	残存率	残存重量g	復原重量g	軸長			実測図	写真
						x	y	z		
225	N e - 4 遺構面直上	大形有溝土錘	1/6	170	425	(8.0)	7.5	(5.5)		
226	N f - 6 上部包含層	〃	1/6	232	464	9.0	8.0	5.0		
227	N g - 5 遺構面直上	〃	1/6	314	523	9.6	(7.0)	7.2		
228	N g - 5 遺構面直上	〃		99						
229	N b - 6 上部包含層	〃		52						
230	N e - 7 近世擾乱層	〃	1/6	270	675	(9.5)	8.2	(7.0)		
231	N e - 7 近世擾乱層	〃		82						
232	N b - 6 上部包含層	〃	1/6	135	270	9.6	4.6	(5.5)		
233	N e - 6-7 上部包含層	〃	1/6	212	424	9.3	7.1	(6.0)		
234	N e - 4 上部包含層	〃	1/6	224	560	10.3	7.3	(5.5)		
235	N e - 7 近世擾乱層	〃		104						
236	N e - 7 上部包含層	〃	1/6	200	400	(10.5)	5.9	(5.5)		
237	N o - 8 上部包含層	〃	1/6	86	215	7.5	5.2	(4.0)		
238	N e - 7 上部包含層	〃	1/6	219	438	(10.0)	7.4	6.3		
239	N e - 5-6 上部包含層	〃		100						
240	N e - 7 近世擾乱層	〃	1/6	231	577	10.0	(7.0)	(5.5)		
241	N e - 7 近世擾乱層	〃	1/6	335	372	10.3	7.0	5.1		
242	N e - 7 上部包含層	〃		50						
243	S c - 1 上部包含層	〃	1/6	376	418	8.7	6.8	7.5		
244	S c - 1 上部包含層	〃	1/6	275	393	7.1	6.2	(6.0)		
245	S g - 15 上部包含層	〃	1/6	297	371	10.4	6.4	5.8		
246	S e - 5 近世擾乱層	〃	1/6	383	638	(11.0)	(7.0)	7.2		
247	S d - 1 上部包含層	〃	1/6	257	643	(10.0)	7.8	7.0		
248	S d - 6 上部包含層	〃	1/6	305	436	9.5	7.2	6.0		
249	S g - 12 上部包含層	〃	1/6	305	610	9.6	8.5	(7.0)		
250	S d - 1 上部包含層	〃	1/6	283	566	10.2	8.2	(7.0)		
251	S d - 1 上部包含層	〃	1/6	293	586	9.9	7.1	(7.0)		
252	S e - 2 近世擾乱層	〃	1/6	190	380	9.8	6.8	(5.0)		
253	S e - 9 近世擾乱層	〃	1/6	300	429	9.8	(6.0)	6.3		
254	S c - 2 近世擾乱層	〃	1/6	182	364	9.6	5.5	(5.0)		
255	S d - 6 上部包含層	〃	1/6	200	400	9.8	(7.0)	(7.0)		
256	S c - 1 上部包含層	〃	1/6	152	304	9.0	5.3	(7.0)		
257	S c - 2 近世擾乱層	〃	1/6	228	570	9.3	(8.0)	(7.0)		
258	S c - 2 上部包含層	〃	1/6	170	425	(10.0)	(6.0)	(7.0)		
259	S c - 1 上部包含層	〃	1/6	206	515	9.8	7.1	(8.0)		
260	S e - 5 近世擾乱層	〃		90						
261	S e - 11 上部包含層	〃		168						
262	S e - 1 上部包含層	〃	1/6	148	370	(10.0)	(6.0)	(7.0)		
263	S b - 4 上部包含層	〃		127						

No.	遺構層序	形態	残存率	残存重量g	復原重量g	軸長			実測図	写真
						x	y	z		
264	S d-1上部包含層	大形有溝土錐	高	176	440	(8.0)	(6.0)	6.6		
265	S e-7上部包含層	"		132						
266	N a-5上部包含層	"	高	177	443	(9.0)	(7.0)	(6.0)		
267	S b-4上部包含層	"	高	200	500	(9.0)	6.4	(7.0)		
268	S d-7上部包含層	"	高	114	285	8.0	5.4			
269	S g-14上部包含層	"		107						
270	S b-4上部包含層	"		95						
271	S c-2近世擾乱層	"		93						
272	S c-1近世擾乱層	"		86						
273	S e-7上部包含層	"		93						
274	S e-6表土層	"		122						
275	S g-14上部包含層	"		90						
276	S e-6近世擾乱層	"		123						
277	S e-4上部包含層	"		100						
278	S h-14近世擾乱層	大型管状土錐D	1	74	74	5.1	3.8		第15図-49	図版9-43
279	S d-1上部包含層	大型管状土錐C	1	57	57	8.6	2.5		" 50	図版9-41
280	S e-11上部包含層	大型管状土錐 その他のもの		19					" 51	図版9-48
281	S h-14近世擾乱層	大型管状土錐D	1	74	74	5.1	3.8		" 52	図版9-42
282	S b-5上部包含層	大型管状土錐 その他のもの	高	139	174				" 53	図版9-40
283	N b-6上部包含層	大型管状土錐C		21					" 54	
284	S d-5上部包含層	有溝土錐4穴	1	189	189	10.6	3.4	5.8	" 55	図版9-49
285	S d-e-4不明	大型管状土錐C	1	29	29	5.3	2.3			図版9-44
286	S e-1上部包含層	大型管状土錐C	高	17	43	5.0	(3.0)			図版9-45
287	N b-5·6不明	大型管状土錐C 備前焼	高	35	70	5.2	3.2			図版9-46
288	S f-6近世擾乱層	小形管状土錐A	1	14	14	3.5	1.8			図版9-47

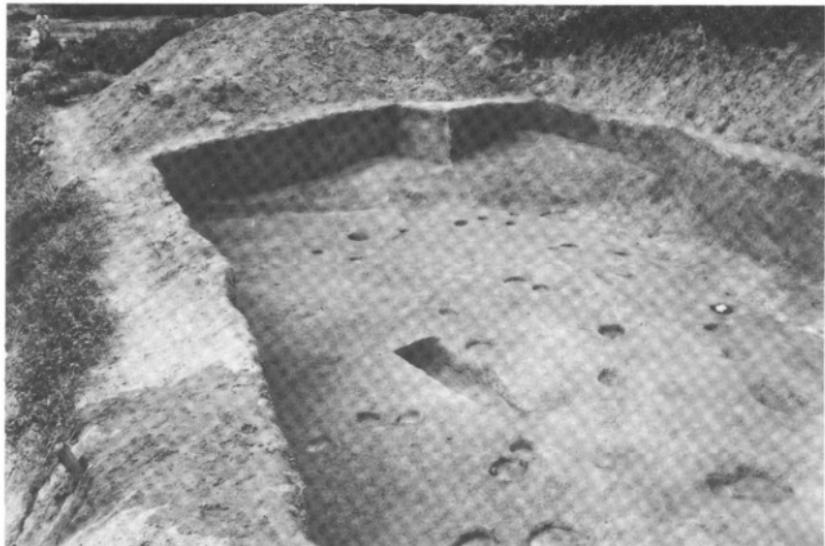
図 版



(1) N区上段遺構群全景（南より）



(2) N区上段遺構群全景（北より）



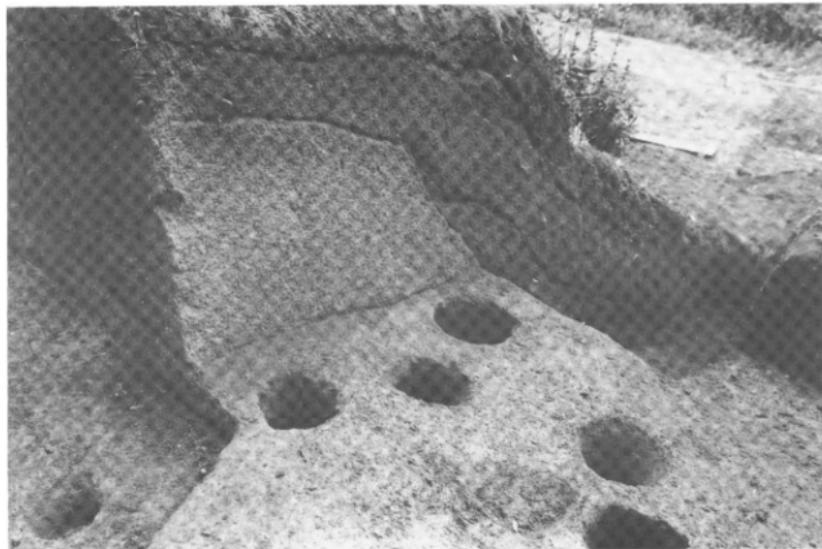
(1) N区上段造構群南部（北より）



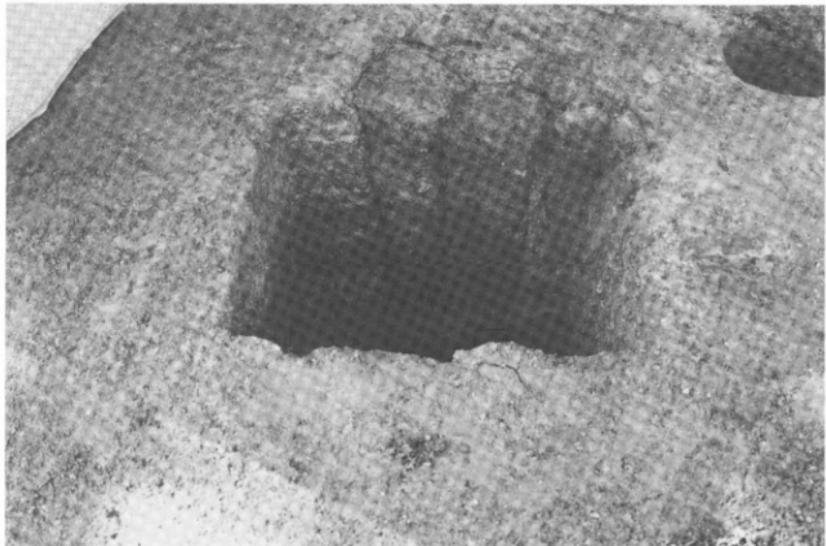
(2) N区上段造構群北部（北より）



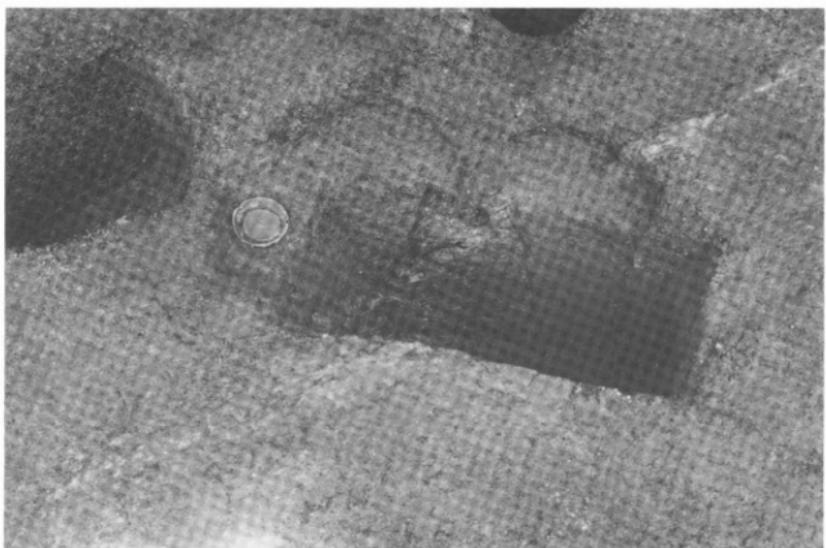
(1) Ne—4.5南壁土層（北より）



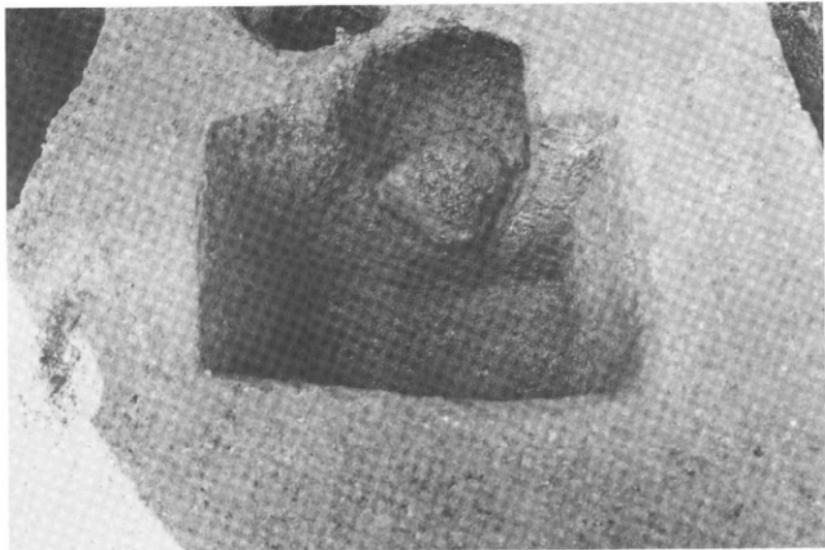
(2) N区第3トレンチ北壁土層（南より）



(1) N区ピット (74, 75, 175) 断面



(2) N区ピット (98, 99, 100) 断面



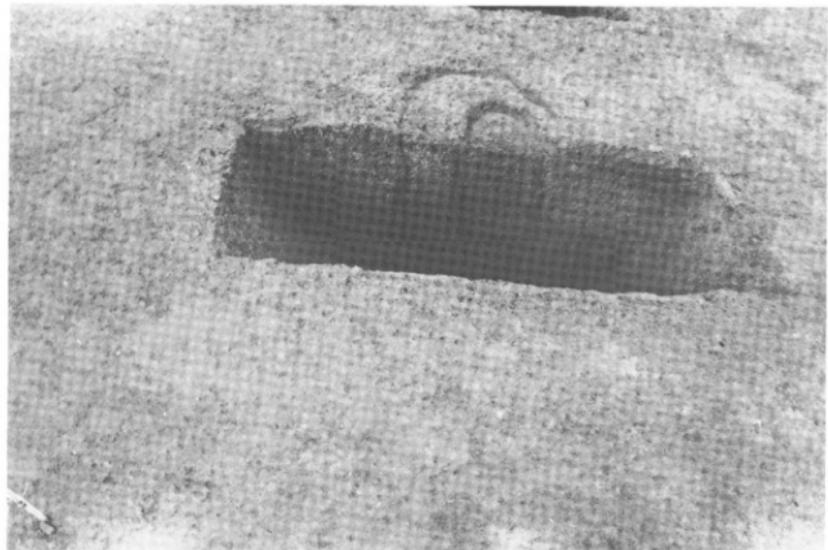
(1) N区ピット (102) 内部根石



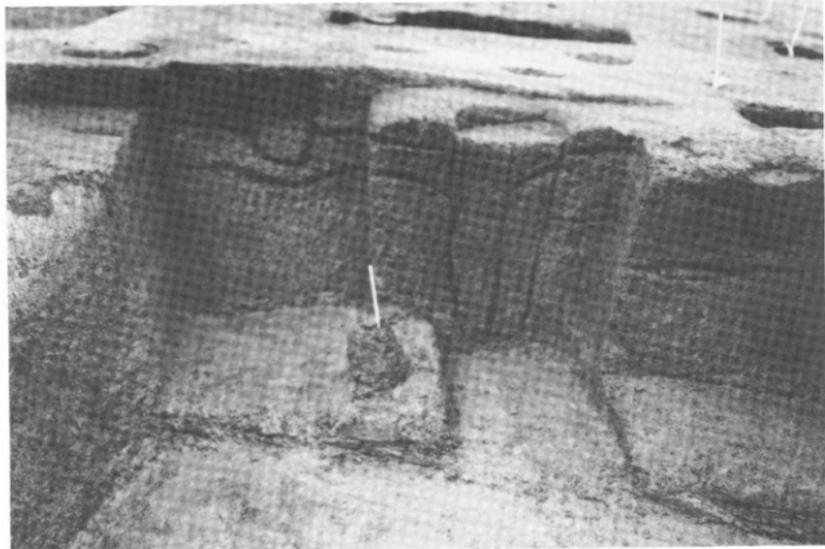
(2) N区ピット (137) 内部根石



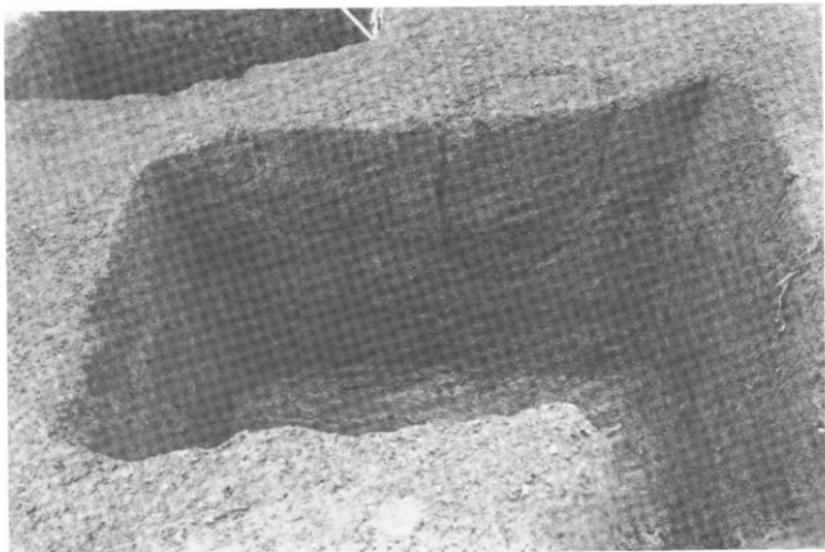
(1) N区下段遺構群全景と西壁土層（東より）



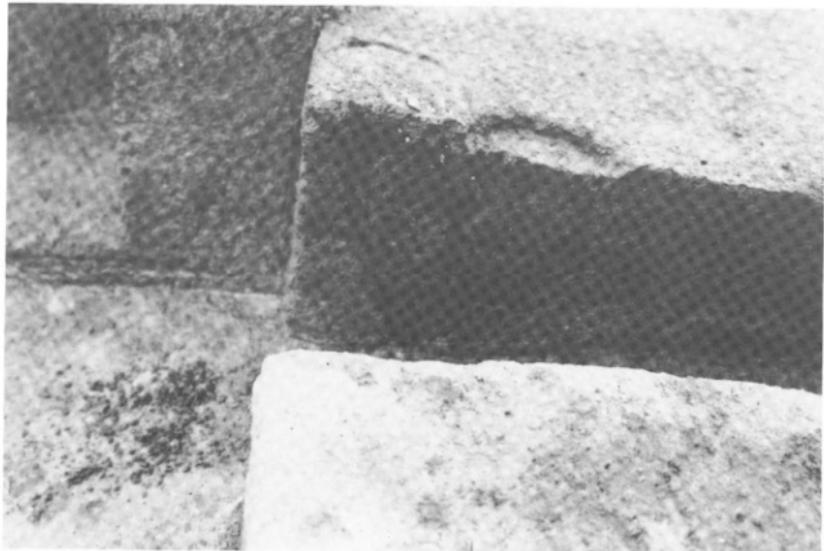
(2) N区ピット（234）断面



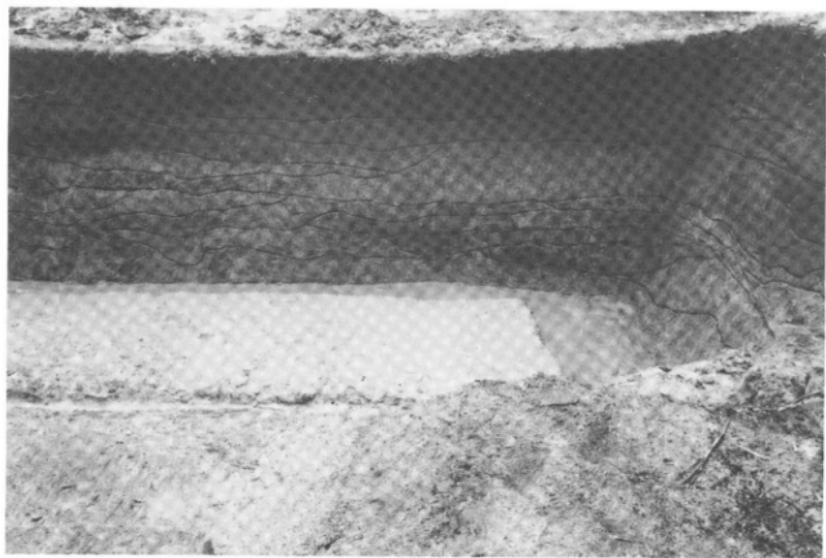
(1) N区ピット (222, 223, 224) 断面



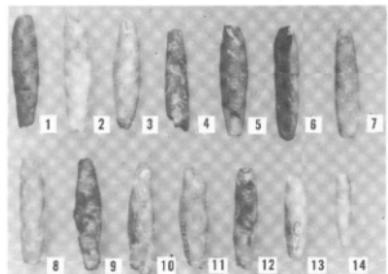
(2) N区ピット (216) 断面



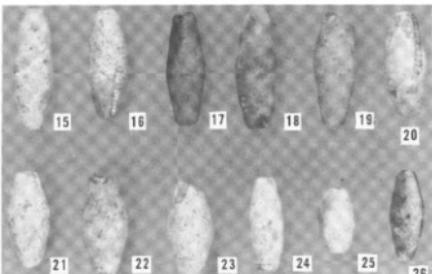
(1) N区ピット (219, 220) 断面



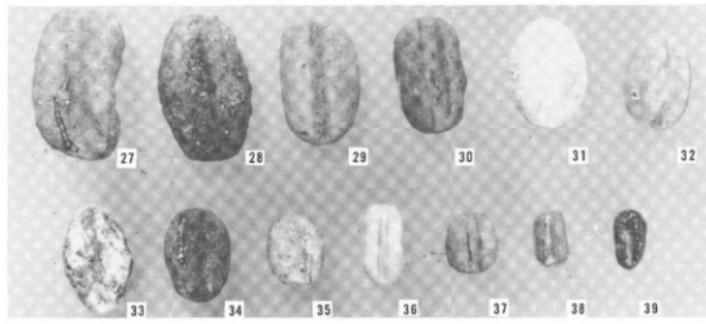
(2) Se-4 東壁土層 (西より)



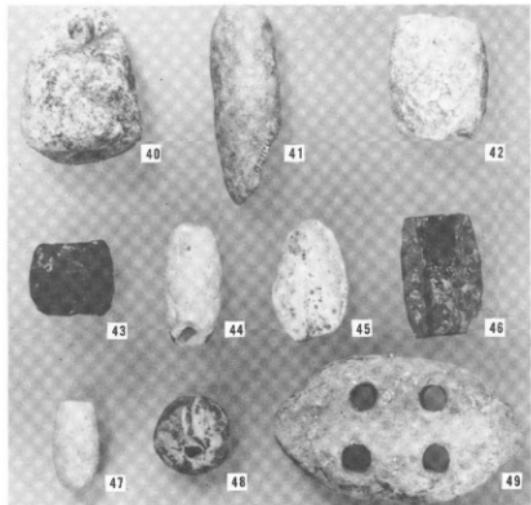
(1) 小型管状土錘 B



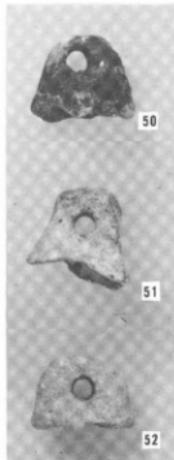
(2) 小形管状土錘 A



(3) 小形有溝土錘



(4) その他のタイプ



(5) タコ型



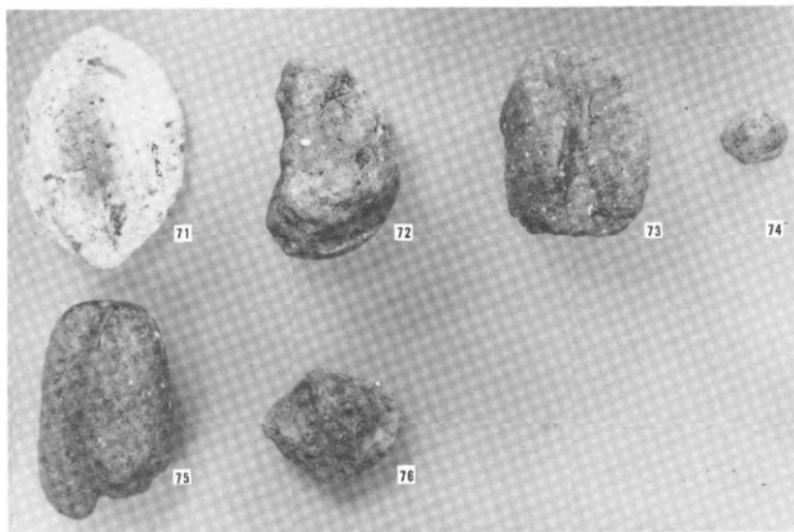
(1) 大形有溝土錘



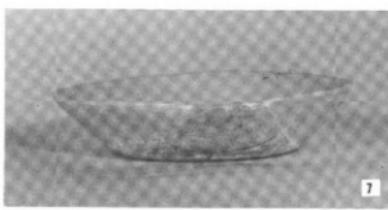
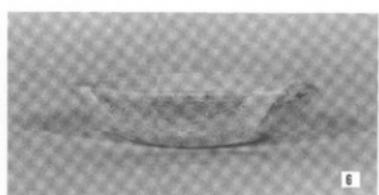
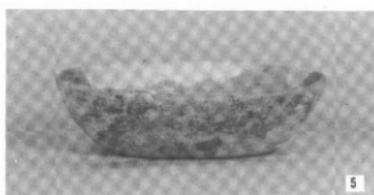
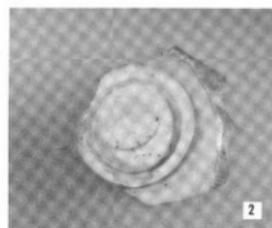
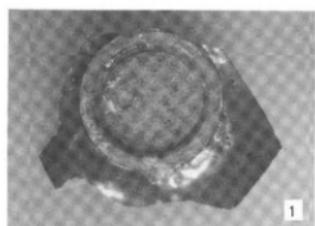
(2) 大形有溝土錘



(1) 大形有溝土錘（造構面直上出土）



(2) 大形有溝土錘及び不明土製品
(ピット、溝内出土)



土器（上段遺構群）

1—SD 1, 3—P136, 5—P30, 8—P30
2, 4, 6, 7—遺構面上